
間違いメール

崎浜秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間違いメール

【Nコード】

N3313A

【作者名】

崎浜秀

【あらすじ】

友達に送ったはずのメールが間違っって知らない人に行ってしまう。そこから始まった、恋の物語。

第一通 間違いメール

間違っ、知らない人にメールを送ってしまった。

その事に気付かず、僕は返事を待ち、その間に眠ってしまった。

僕は、今年、高校二年生になった。名前は倉田くらた 雅之まさゆき。

仲のいい友達からは『マサ』とか『ユキ』とか呼ばれている。

進路とかはまだ決まっていなかったが、進学はしないだろう。と、言うか、出来ない。

全ての教科が平均的で、これと言って才能はない。

そんな僕が、朝、目を覚ましたのは、枕元に置いてある携帯の着信音でだった。

布団からそっと手を出して、携帯を取った僕はゆっくりと携帯を開いた。

もうすぐ五月だと言うのにまだ、少し寒かった。カーテンの向こう側から聞こえる音で、雨が降っているのが分かった。

雨の日は学校に行くのが嫌になる。

まだ、完全に目の覚め切っていない僕は、ボンヤリと携帯を見た。

待ち受けにはメールのマークがついていた。名前は無く、全く知らない人からだった。

「何だよ……。いたずらメールか……。」

そう呟き、メールを消そうとした。しかし、メールのタイトルを見て僕は飛び起きた。

タイトルは『間違えてます』だった。

もしやと思い、僕はすぐに送信したメールのアドレスを見た。

やはり、そのアドレスは教えてもらったアドレスと違っていた。

「うわーっ・・・・・・・・。最悪だよ・・・・・・・・。」

そう言って両手で頭を抱えた。

広いとはいえない切れない僕の部屋。ベッドの横には机があり、僕はその椅子に座って考え込んでいた。

小さな窓がついていて、あとは洋服ダンスが一つと本棚がある。本棚にはもちろん漫画しか置いてない。

机に置いた携帯をジッと見ながら、色々と考えた末に出した結論は、とりあえず謝ると言う事だった。

第一通 間違いメール（後書き）

初めて書く、恋愛小説です。

僕なりに頑張って書いていきますので、色々とアドバイスや感想などをいただけると嬉しいです。

第二通 メール友になりませんか？

学校に着くと、早速友達の健介が、僕の席にやって来た。フルネームは加藤 健介。僕よりも体が大きく、野球部に入っている。

僕と健介は同じ中学で結構仲のいい友達だ。

そんな彼が、僕の前の席に座り顔を覗きこんだ。

そして、鞆から教科書を出している僕に質問を浴びせた。

「なあ、何でメールしなかったんだ？ずっと待ってたんだぜ！」

やはり、メールの事だった。間違った何て言える訳も無く、僕は苦笑いを浮かべながらそれに答えた。

「ごめん。アドレス書いた紙を無くして……。」

「何やってんだよ！」

そんな僕の答えに健介はそう言って深いため息を吐いた。そして、僕に右手を差し出した。

なぜ、右手を出したのか分からなかったので、僕は彼の右手に自分の右手を置いた。

すると、健介は驚きながら手を退けて、僕に怒鳴り散らした。

「何やってんだ！気色悪い！」

「いや、右手を差し出されたから……。」

「違うだろ！携帯だよ！」

そう言われて、僕は渋々携帯をズボンのポケットから出した。その時、メールが来ている事に気付いた。

マナーモードにしていたせいで、メールが届いているのに全く気付いていなかった。

ここで、メールを見る訳にも行かないので、僕は何とかごまかそうと思い、携帯を健介に渡した。

「あれ？メール届いてるけど、見ないのか？」

やはり、健介はメールに食いついてきた。しかし、僕は慌てずに対処した。

「どうせ、母さんからだろうから……。」

「ふーん。そっか。」

そう言いながら健介は自分のアドレスを登録した。登録を済ませると、携帯を返して席から立ち上がり、僕の顔を指差しながら言葉を発した。

「今日こそ忘れるなよ！いいな！」

「うん。わかったよ。」

僕は一応そう言って軽く微笑み、健介を見送った。健介が自分の席に戻った事を確認して、僕はメールを読んだ。

『これも、何かの縁ですし、よかったらメル友になりませんか？』

そう言う内容のメールだった。この時は、あんまり、乗り気じゃなかったが、取り合えずOKを出しておいた。

第三通 メル友

メル友になってから、一週間が過ぎた。

僕は気にしてなかったが、メル友は女の子で僕と同じ高校二年生だった。

名前は鈴木^{すずき} 安奈^{あんな}。

サッカー部のマネージャーをやっているらしい。走る事が好きで、一時期陸上部に入っていたらしいが、何か嫌な事があって辞めたらしい。

何があったかは、本人も教えたくないだろうから、詳しくは聞かない事にした。

得意な科目は国語と社会。苦手な科目は数学と化学・生物。

と、色々聞いた。

僕も色々と教えた。得意な科目（無い）や苦手な科目（全部）や部活（帰宅部）など。

まあ、教えても教えなくても同じような物だが、彼女が聞いてきたので一応答えただけだった。

メールはいつも、彼女の方から送られてきていた。

僕はそのメールに返事を返して、質問に答えるだけ……。

そして、今日も夕方、ベッドに横になって漫画を読んでいると、携帯の着信音が部屋に鳴り響いた。

「ンッ？ 安奈かな？」

読んでいた漫画を開いたままベッドに伏せて置き、体を起こして机の上の携帯に手を伸ばした。

しかし、バランスを崩し、僕はそのまま頭から落ちた。床に頭を激しくぶつけ、コブが出来ていた。その頭を摩りながら立ち上がり、

机の上の携帯を手を取った。

携帯には、安奈からのメールが届いていた。

この時間になると、毎日のようにメールが届いていた。

『やっと、サッカー部の練習が終わったよ。

でも、私の仕事はこれから（泣）

しょうがないよね。雑用がマネージャーの仕事なんだし（笑）

それじゃあ、頑張ってくるよ』

このメールを見ていると、彼女の大変さが何となく伝わってきた。
僕は椅子に座り、彼女に返事を返す事にした。

『頑張れ！マネージャー！』

と、返事を返した。

第四通 小さな事

今日も、ベッドに横になって漫画を読んでいると、机の上で携帯が着信音を響かせた。

相変わず、学習せず、僕は体を起こして必死に机の上の携帯に手を伸ばした。

あと少しで手が届きそうだが、結局この日もベッドから落っこちた。

頭を摩りながら立ち上がり、机の上の携帯を手に取りメールを確認した。

『最近はこの時間でも外は明るいな。私の性格みたい(笑)』

今日はとっても疲れたわ。何度も麦茶を作らされて……。

全く、マネージャーは家政婦じゃないのよ(怒)』

それに対し、僕は、

『大変だったね。もう、五月も半ばだからね。』

ずいぶん暑くなって来たから、喉が渴くんだろうね。』

と、返事を返した。暫くすると、すぐに返事が返ってきた。いつもは、もっと遅いのだが……。

そう思いながらもメールを見た。

『そうだよね。もうすっかり、夏だよね。』

私も、日焼けしないようにしなきゃ！

マサも、日焼けしないようにね。』

日焼けなんて、するはずがない。

僕は帰宅部でほとんど、外で走り回ったりしない。

だから、日焼けなんてする訳がない。

そう思いながら、深いため息を吐いた。

そして、もうすぐ七時だと言うのに明るいうちの外を眺めた。

『僕は帰宅部だから、日焼けはしないと思うよ』

僕はそう返事を返して、ゆっくりとベッドの上に置いた漫画を取りにいった。

漫画を手にとった瞬間、携帯の着信音が鳴り響いた。

やはり、今日はやけにメールを返すのが早かった。

『そんな事ないよ。紫外線は凄いんだから！

油断してたら、すぐに日焼けしちゃうよ！

気をつけなきゃね』

『まあ、気をつけるよ。それより、今日はやけに返事返すの早くない？』

僕は、メールを返すのが早い理由を聞くためにそう送った。

そして、すぐに返事は返ってきた。

『今日は、後片付けは一年生がやるんだって。だからかな？

まあ、私がやってもいいんだけどね。

それより、マサは今日何かいい事あった？』

とりわけ、いい事があった訳でもなく、嫌な事があったわけでもない。

そんな返事を返すわけにもいかず、僕は必死に考えた。

朝からの行動の一部始終を思い返した。そして、出した答えは・・・

・。

『まあ、いたって普通だったかな?』

『普通って……。何か一つ位、いい事無かったの?』

しいて、上げるならば英語の授業で指名を受けなかった事くらいだろうか。

いや、そんな事を返しても、仕方ないし……。悩んでると、向こうからメールが来た。

『無いなら、いいや。そんな日もあるからね。』

私はね。今日は結構ラッキーだったかな。

遅刻しなかったし、授業では一度も当てられなかったし。

いつもなら、バンバン当てられるんだけどね』

小さい事だと思ったが、そんな事でよかったのかもしれない。

それだけでも、結構盛り上がるものだ。

その後も、僕と安奈のメールは続いた。

第五通 梅雨の日の決心

もう梅雨の時期だ。

外は雨が降り、湿気で教室内がジメジメしていた。この時期はなぜか、教室の中が暗く感じる。

そんな事を思いながらも、安奈にメールを送った。

最近は慣れてきたのか、自分からメールを送るようになっていった。と、言うより、彼女の事が気になっていた。

それに、気付いたのも、つい最近の事だった。

お互いの顔を知らないため、僕の中で彼女がどんな顔なのかと想像が膨らんでいった。

『もう、梅雨の時期だな……………。』

この時期が、一番嫌いかな……………。そっちも雨?』

と、送った。返事が返ってきたのは、次の休み時間になってからだった。

『うん。こっちも雨。どうして、こうも雨が続くのかな?』

何だか、憂鬱になっちゃうよね?』

そのメールにすぐに返事を返そうとしたが、そこに健介がやってきたのだった。

健介は僕の前の席に座り、いつものように顔を覗きこんだ。

「な、何?」

恐る恐る、僕はそう言った。表情を変えない健介を見ると、とても怖かった。

そして、急に僕の肩に手を置いて、

「俺に誰か良い娘、紹介してくれよ！」

その言葉に僕はポカンと口を開けて、呆気にとられてしまった。何を言うのかと思えば、女を紹介してくれと・・・・・・・・。

学校でも目立たない、この僕に、紹介できる女の子がいるわけがなかった。

唯一いると言えば、安奈くらいだが・・・・・・・・。

絶対に紹介したくなかった。色々と聞いてくるだろうし、健介に紹介したら僕とメールをしなくなりそうだったからだ。

「僕に女の子の知り合いがいると思う？」

その言葉に健介はあっさり納得した。

「そうだよな。お前に女の知り合いなんていないよな」

健介は僕にそう言い残して、僕の目の前から消えていった。

この時、僕は絶対に安奈の事を健介に知られてはいけないと思った。それと同時に決心した。安奈とのメールのやり取りを誰にも言わないと・・・・・・・・。

第六通 テスト勉強

梅雨も過ぎて、もう一学期も終わりに近づいていた。しかし、その前にまだ大きなイベントが残っていた。

それは、期末テストだ。

僕は自分の部屋で、一応教科書を出して勉強をしていた。

その時、携帯の着信音が鳴り響いた。

安奈からのメールだった。

『もうすぐ、期末テストだね。こっちは明日からだけど、そっちはまだかな?』

もちろん、僕の通う高校も明日から期末テストが始まる。

そのために、一日掛けて暗記しようとしていたのだ。無理だろうが・
・・・・。

『こっちも明日からテストだよ。嫌だな・・・・・。』

一日掛けて暗記するつもりだよ・・・・・。』

『そうなんだ。でも、徹夜で勉強しても頭に入らないらしいよ。』

人間の集中力って、15分しか保たないらしいから。

その15分置きに何度も、繰返し勉強すればいいって、何かで言ってた気がする』

『本当かな?』

『もしかして、疑ってるの?』

人が親切に教えてあげてるのに(怒)』

『別に、疑ってるわけじゃないけどさ・・・・・・・・』

実際、あんまり信用はしていない。そんな事で、覚えられるのなら、学校の授業時間は15分で十分じゃないか。

そんな事を思いながらも、顔は自然に笑みがこぼれていた。

暫く彼女とのメールが続いたが、12時を回っている事に気付いた。

『うわっ！何時の間にか12時回ってる！勉強してないよ！』

と、送った。すると、彼女の返事も驚いた様子で帰ってきた。

『本当だ！今から、急いで勉強しなきゃ！』

それじゃあ、また明日はお互い頑張ろうね』

結局、この日は徹夜で勉強した。試しに、安奈の言った方法を試し
て見たが、夜中に休憩を入れるとても眠くなり、全く効果は発揮
されなかった。

結局、テスト勉強は進まず、そのまま眠りに着いてしまっていた・
・・・。

第六通 テスト勉強（後書き）

感想を書いてくださった皆さん。

ありがとうございます。

アドバイスなどもためになりました。
これからも、よろしくお願いします。

第七通 突然の誘い

結局、期末テストは散々な結果で終わり、夏休みの補習が決定してしまった。

補習だけは免れたかったのだが……。致し方あるまい。自業自得だ……。

その事を、安奈に報告すると、

『そっか。補習になっちゃったんだ。』

ごめんね。私がメールをしたばかりに……。』

と、送られてきた。別に、安奈のせいではない。

結局、メールをしていなくても、僕は補習になっていただろう。基本的にいつもギリギリの点数なのだから……。

『別に、気にしなくて良いよ。去年もそうだったから（笑）』

『そっか。それじゃあ、頑張ってね』

去年も補習だったと言うのは全くの嘘だ。こうでも、言っておかないと彼女に申し訳ない気がした。

僕は枕に顔をうずくめて大声で叫んだ。ストレス解消だ。

そうしている内に、安奈からメールが届いていた。

『今度の休みって、暇かな？もしよかったら、会えないかな？』

突然の事で気が動転した。そして、同時に不安が頭の中をよぎった。僕は大きくカッコよくもなく、センスが良い訳でもない。

ましてや、夏休みの補習で頭が悪いと言う事ははっきりとされている

る。

今まではお互いの顔を知らなかったから、何も気にしないでメールをする事が出来ていた。

こんな僕の姿を見て、彼女が愛想を尽かし、メル友を辞めたらどうしようと思った。

混乱している頭では、全く考えがまとまらなかった。

それは、当然だろう。

中々僕が返事を返さないのも、安奈の方からメールが届いた。

『もしかして、忙しい？それなら、それでいいんだけど……。』

この時、後先考えずに僕は返事を返してしまった。送った後に後悔して、また、悩みこんだ。

返信したメールの内容はこうだ。

『全然、忙しくないよ。今度の休みに会おうよ。』

第七通 突然の誘い（後書き）

今回、アクセス数が100人を超えました。

苦手の恋愛小説を言うだけあって、自信は無かったものの、こんなにも読んでくれている人がいてくれて、大変嬉しい事この上なしです。

まだまだ、続くこの恋の物語を最後まで読んでいただけたら嬉しいです。

第八通 待ち合わせ

結局、休みの日に会う約束をしてしまった。

待ち合わせ場所の駅の入り口に立って、安奈を待っていた。

人通りは多く、入り口の前には大きな噴水があり、その右側には時計台が立っていて、時を刻んでいく。

もうすぐ、待ち合わせの時間だ。

噴水の池の周りの淵には、沢山の人が座り込んでいる。

待ち合わせをしている人も、中にはいるのだろう。

僕はゆっくりと、深呼吸を三回して心を静める。

いつかは、会わなきゃ行けないんだろうと思っていたが……。まさか、こんなに早いうちとは思っても見なかった。

緊張して足が震えている。そして、もう一度深呼吸を三回する。

と、その時、携帯がポケットの中で激しく震えた。もちろん、安奈からのメールだ。

『今、どこにいる？私、もう駅の入り口にいるんだけど……。』

ついでに、私は水色の洋服を着てるよ。それから、黒のショートパンツかな』

（水色の服の……。黒のショートパンツ……）

よく、探したが見つかる気配は無い。僕が探すより、安奈が僕を探す方が早いだろう。

そう思いメールを打った。

『僕が探すより、安奈が探した方が良いかも……。』

黒い服の上に白い薄手の上着を着て、黒い長ズボン……。』

そのメールを送った直後、背後から声がした。その声は、可愛らしく明るい声。

僕はそんな風に感じた。

「あっ！いた！」

振り返った僕の前には、確かに水色の洋服で黒のショートパンツの少女がいる。

黒髪は肩につく程度の長さで、色白の肌、とても可愛らしく微笑み僕の方を見ている。

その瞬間、僕は気が動転して頭の中が真っ白になり、何を言っているのか分からなくなった。

と、言うより、彼女は僕の想像していた以上に可愛い。

「マサだね？」

黙っている僕に、安奈の方が恐る恐る声を掛けてきた。

気を取り戻し、僕はとっさに声を出す。

「エッ、あっ、はい」

が、その声は裏返る。緊張し過ぎたのだろう。僕は恥ずかしくなつて、視線を逸らして俯いた。

こんな可愛い娘とメールをしていたと思うと、なかなか言葉がでない。

彼女の身長は僕とほぼ同じ（実際は彼女の方が少し高い）で、腰を低くして僕の顔を覗きこんだ。

「どうしたの？もしかして、会わなきゃよかったとか思ってる？」

「えっ！そんな事ないよ！」

とっさに出た言葉がこれだ。周りの目が、こっちに集まっている気がする。

きつと、僕の気のせいなのかも知れないが、この時はそう感じていた。

第九通 喫茶店のジャンボパフェ

安奈と僕は、近くの喫茶店に来ていた。

駅の入り口で立ち話をしている訳にもいけないので、喫茶店に移動したのだった。

しかし、喫茶店でも安奈は男性陣の視線を集めていた。

それだけ、魅力的なのだろう。僕なんかと一緒にいる人ではない。向かい合わせに座ったが、僕は彼女の顔を直視する事は出来なかった。

そこに、店員さんが注文を取りにやってきた。

「ご注文は？」

「私はチョコパフェで、マサは何にする？」

安奈はそう言って笑顔で僕の方を見た。その笑顔を見た瞬間に、僕の頭は混乱し、そのあと何と言ったか分からないが、届いたのはジャンボパフェだった。

安奈のチョコパフェと比べると、十倍近くの大きさで、座っていると安奈の顔が見えない。

「だ…大丈夫？こんなに食べられるの？」

「だ…大丈夫だよ……」

心配そうな瞳で僕を見る安奈。

そんな安奈を安心させようと、一生懸命ジャンボパフェを口に運んだ。

しかし、ジャンボパフェはかなり手強かった。

何度スプーンを往復させても、減る様子は全く無い。

だが、僕は諦めず食べ続け、ついにジャンボパフェを攻略した。食べ終わって、暫くは夏だと言うのに寒くて、凍えそうだった。よく食べきる事が出来たと、自分でも不思議に思う。

僕と安奈は暫く喫茶店で話をしていた。

メールとは違い、直接声を聞きながら話すと何だが温かみを感じる。ふと、外を見ると何時の間にか蒼かった空が、オレンジ色に輝きを放っている。

僕は喫茶店の時計を見た。すでに、六時を回っていた。

「そ…そろそろ。帰ろうか？」

僕のその言葉に、安奈は初めて空がオレンジ色に染まっている事に気がつく。

「もうこんな時間……。楽しい時間って…アツと言う間だね」

安奈はそう言って僕に微笑んだ。微笑んだ顔を見ると、僕も嬉しかった。

喫茶店を出ると、安奈を駅前まで送った。入り口で僕と安奈は向い合い、

「今日は楽しかった。家に着いたら、またメールするね」

「うん。待ってるよ……」

恥ずかしがりながらも、僕はそう言った。

「それじゃあ。またね」

彼女はそう言って手を振って駅に入っていく。僕は暫くその後姿に手を振った。

安奈の姿が見えなくなり、手を振るのを止めてその場に立ち尽くしていた。

安奈に言われた事がとても嬉しかったからだ。

それを思い出しながら、何度も笑顔をこぼしながら、僕は家に帰った。

第十通 春が…来た？

安奈と会ってから、僕はいつも安奈の事を考えるようになった。きつと、彼女を好きになったのだろう。もちろん、片想いなのだろうが……。

そんな事は百も承知だ。それでも、良いと思っている。授業中もボンヤリして、全く頭に入らなかった（何時もの事なのだが……）。

そんな僕の前に何時もの様に、健介がやってきた。毎日毎日、いい娘を紹介してくれと言って来る。きつとこの日もそうかと思っていたが、違った。

「マサ！ 俺にもようやく春が来たぞ！」

「もう夏休みになるんだけど……」

僕は冗談半分でそう言って笑おうとしたが、健介が鋭い目つきで睨んでいるのに気付き静止した。

その目つきの鋭さに体を後ろに引いた。

今にも殴り掛かってきそうだったので、僕はいつでもガードできる様に机の中のノートに手を伸ばした。

しかし、鋭かった目つきは和らぎ、急に笑みを浮かべ始めた。それが、余計に恐ろしく感じた。

「フフフフツ……。それじゃあ、俺は彼女を口説いてくる」

僕は一つ忠告しようとしたが止めて置いた。

何て言おうとしたかと言うと、

「その娘の前では、その笑い方は止めた方がいいよ」

だった。多分、言った瞬間に僕の意識が吹っ飛んでいるだろう。健介は軽快な動きで席を立ち、鼻歌を歌いながら僕の前から去っていった。

その後の話で分かったが、やっぱり彼はその娘を口説く事が出来なかったと、言う。

理由は聞かなかったが、大体の検討はつく。

その後、僕は散々彼の愚痴を聞かされ、安奈にメールを送る事も出来なかった。

どちらにしても、この日安奈からは一通もメールが届かなかった。

理由は分からないが、とても不安だった。

嫌われたてしまったのじゃないかと……。

第十一通 夏休みの補習

メールが来なくなって何日もたった。

僕は自分からメールを送ろうとしたが、なかなか送れないでいた。怖かったからだ。

彼女に嫌われていて、もうメールもしたくないと思われているんじゃないかと、そんな思いがあったためだ。

安奈からのメールが途絶えたため、僕は肩を落とし何度もため息を吐きながら学校へ向った。

もう夏休みだと言うのに、僕は補習のため学校に行き来している。

クラスでは僕の他にも、何人もの補習の生徒がいたが、真面目に受ける者は居ない。

教室の中は蒸し暑く、動かなくても汗が湧いて出てきた。

運動場からは、サッカー部の叫び声や野球部がバットでボールを打つ音が響き渡る。

もちろん、夏には欠かせない、とてもうるさいセミの鳴き声も響いている。

蒸し暑い教室には僕しかなかった。担当の先生は何も言わずプリントだけを置いて、教室から出て行った。

補習は勝手にやってろという事だろう。何て嫌味な先生だ。

そう思っていたが、口に出せる訳も無く、僕はプリントの問題を解いていた。

一人で課題のプリントに向き合っていたが、安奈の事が気になって集中できなかった。

「あゝ！ 駄目だ!!」

そんな事を叫びながら、頭をくしゃくしゃと掻き毟った。

他の人から見れば、ちょっと頭のおかしい人の様に見えるのだ

ろう。

しかし、そんな事など全く気にならなかった。

「はぁゝ。……完璧、嫌われたかな……。」

さっきまで、叫んでいた僕だったが、急にしんみりとした。

安奈に嫌われたんじゃないかと思うと、急に元気が無くなった。そして、机にうつ伏せになった。すると、涙がこみ上げてきた。

第十一通 夏休みの補習（後書き）

評価の方、ありがとうございました。

まだまだ、文章を書く力が無く読みにくいかも知れませんが、どうぞよろしくお願いします。

第十二通 再会

補習も終わり夏休みも随分過ぎていた。一向に安奈からのメールは来ない。

僕は特にする事も無く、部屋のベッドに横になって漫画を読んでいた。

安奈からのメールが途絶えてから、携帯の着信音が鳴り響く事がなく静かだった。

僕は安奈の事は忘れられなかったが、忘れようと努力していた。部屋の漫画は何度も読んだ。だから、もう読む気がしない。

「新しい漫画でも買うか……」

僕はそう言って、財布を持って家を出た。家から本屋まではさほど遠くは無い。だから僕は歩いて本屋に向った。

本屋は沢山の人が立ち読みをしていた。そんな人々の間を抜けて、読みたい漫画を探した。

面白そうな漫画を何冊かまとめて買った。しかし、よくお金が足りたものだ。

本屋を出てすぐだ。忘れようとしても忘れられない安奈の声が耳に届いた。

「あっ！ マサ！」

その声のする方に顔をやると、彼女が笑みを浮かべながら僕に駆け寄る。

白のブラウスの下に黒のシャツを着ていた。青いミニスカートが風で揺れた。

「安奈……」

僕は彼女の顔を直視できなかった。まあ、それもそのはずだろう。暫く、メールのやり取りもしていなかったし、嫌われていると思っていたのだから……。

そんな僕に、彼女は申し訳なさそうな表情で、両手を合わせて言った。

「ごめん！ 私、携帯無くしちゃって……。

買い換えただけで、マサのアドレス分からなくて……」

「な…何だ。そうだったのか……」

僕はホッとしたと同時に、表情が明るくなった。すぐに携帯を出して安奈にアドレスを教えた。

安奈は愛らしく微笑みながら僕に言った。

「これで、またメールできるね」

この言葉を聞いた途端、とても嬉しくなった。

僕は安奈と別かれて、浮かれながら家路についた。

家についても、僕はずっと浮かれていた。

買って来た漫画をそのままにして、彼女からのメールを待った。

第十三通 海への誘い

僕はまた安奈とメールのやり取りを再開していた。

暫くやっていなかったせいか、僕も安奈もいろんな話題で盛り上がった。

部活の話や身近な出来事を聞かされた。たまに、愚痴も聞かされたが、それでも、僕は嬉しかった。

彼女とまたメールができる事が……。

夏休みももう終わりに近づいたある日の事。

『もうすぐ、夏休みも終わりだし、一緒に海にでも行かない?』

安奈が海に行かないかと誘ってきた。

別に海は嫌いじゃない。だが、あんまり行きたくない場所でもあった。

実は僕はカナヅチだ。

全く泳げないため、海には近づかないようにしている。

しかし、ここで断ったりしたら嫌われるんじゃないかと思い、とりあえずOKしたがすでに後悔していた。

話し合った結果。

早い方がいいと言う事で、明日行く事になった。

『明日は、私が弁当を作って行くね。』

楽しみしててね。美味しく作るから』

もちろん、楽しみだ。楽しみで仕方なかった。

が、その一部で不安が頭をよぎる。

やっぱり男は泳げた方がいいのだろうか……。

そんな事を考えながら、返事を返した。

『うん。明日は、楽しみにしてるよ』

『それで、マサは泳げる？』

やはり、この質問が来た。僕は焦り部屋の中をグルグル歩き回っていると、携帯の着信音が部屋に鳴り響く。

その着信音で、それが安奈からだとわかった。

最近、着信音の設定の仕方を覚えたのだ。恐る恐るメールを見ると、

『ちなみに私は泳げないんだけど……』

海は別に泳ぐためにあるわけじゃないもんね』

以外だった。まさか、安奈も泳げないなんて……。

でも、少し安心した。泳がなくてすみそうだったからだ。

『恥ずかしながら、僕もカナヅチなんだ。』

本当なら、泳げたほうが良いんだろうけど……』

『そうなんだ。でも、そんな関係ないよ。』

人には得意、不得意があるのよ。だから、恥じる事は無いの。もっと、前向きに考えようよ』

と、安奈は僕を励ましてくれた。何だかとても嬉しかった。

この日は中々眠る事が出来なかった。明日が楽しみだ。

第十四通 海

僕は今日、安奈と一緒に海に来ている。空は蒼く澄み渡り、海に来るには絶好の日だ。

白く輝く砂浜、蒼く煌く海に白い波。これ以上、最高の条件はない。砂浜にはいくつものビーチパラソルが差してあって、大勢の人が押し寄せていた。

「やっぱり、人が多いね」

そう言っただけを見て微笑んでいる安奈の横顔に見とれていた。綺麗だった。海のきらめきが安奈を更に美しく見せていた。

ボーッとしていると、顔を安奈が覗きこんだ。びっくりした僕は、後ろに仰け反り尻餅をついた。

「どうしたの？　もしかして、眠れなかったとか？」

「まあ、そんな感じかな？」

立ち上がりながら、ズボンに付いた砂を払って微笑む。そんな僕に安奈は微笑み返して言った。

「それじゃあ…。私は着替えてくるね」

着替えてくるという言葉に、一瞬戸惑った。海に来て、着替えると言えは一つしかなかった。

だが、念のために聞いてみる事に。

「着替えるって？」

そう聞くと、安奈は少し頬を赤く染めた。いや、僕にはそう見えたのだ。

「水着よ！ み・ず・ぎ！」

「み、水着！！」

やっぱりそうだった。その瞬間に、気が動転し目の前が真っ白に……。

安奈の水着姿が見れるという喜びで、胸が一杯にだった。

荷物を砂浜に置き、水着に着替えに行った安奈の帰りを待つ事にした。

暫くすると、安奈の声が背後から聞こえた。

「着替えてきたよ」

その言葉で振り返った僕の顔に、真っ白のバスタオルが飛んできた。バスタオルは、僕の顔に被さり視界を遮る。

そのバスタオルを急いで取って安奈の方をみた。

水玉の水着を着た安奈が僕の目の前にいた。水着姿はやっぱり可愛く、心が癒される。

僕が安奈の水着姿に見とれていると、安奈が恥ずかしそうに頬を赤く染めた。

「ジロジロみないで……。恥ずかしいから……」

「い、ごめん」

一応、謝って目を逸らしたが、やはりすぐに安奈の方に目がいく。

それが、男の習性みたいなものだ。僕と安奈は二人でビーチボールをする事に……。

しかし、結果は圧倒的な強さ（僕が弱すぎた）を見せつけ、安奈の圧勝に終わった。

その後は、砂浜に座り二人で何気ない会話で時を過ごした。

海にまで来て、話をして終わるなんてどうかと思ったが、安奈の水着姿も見れて、僕的には満足している。

帰る頃には、日が海に沈みかけ、オレンジ色に染まっていた。

「楽しかったね。また、メールするね」

彼女はそう言って僕に微笑む。

オレンジ色に輝く海をバックに微笑んだ安奈の顔は、とても美しく忘れる事は出来ないだろう。

第十五通 二学期の初日

二学期が始まった。

席に座っている僕の前の席に、例のごとく健介がやってきた。

健介は機嫌が悪そうだったため、僕はあんまり関わりたくなかったが、そんな事はお構いなしに健介が言った。

「なあ！ 聞いてくれよ！」

別に聞きたくは無いのだが……。断る事も出来ずに、

「な、何？」

と、顔を引きつらせながら健介の顔を見る。その瞬間、健介が僕の机を激しく叩き、大きな音を響かせた。

その音は教室中に響き渡り、生徒達は驚きの表情でこっちに注目している。

もちろん、僕も驚いた。放心状態で健介の顔を見ると、健介は言う。

「俺の良さが分かるのは、お前だけだぞ！」

「はい？」

全く訳が分からない。何が言いたかったのだろう。と、言うより僕にも彼の良さは分かっていないんだが……。

しかし、そんな事を口にした瞬間に、確実に半殺しにされるだろう。そんな事を考えながら、一応愛想笑いをしながら、彼の話を聞く事にした。

「実はな……」

とりあえず、彼の話はよく理解できないため、省略しよう。
そんなこんなで、二学期の初日は幕を閉じた。

『学校って、やっぱり疲れるね。』

でも、友達と会えるからいいよね』

学校が終わり、家に帰る途中で安奈からメールが届く。

歩きながらメールを読んでいたら、電柱に頭をぶつけた。

痛みにうずくまりながらも、彼女にはちゃんとメールを返信する。

『そうかな？ こっちは友達の愚痴に付き合わされてさ……。』

まあ、ちゃんと聞いてなかったんだけどね（笑）』

『大変だね。二学期の初日から愚痴聞かされるなんて……。』

『そうなんだよ。すぐに殴るからさ、逆らえなくてね……。』

けど、いい奴なんだよ』

僕は健介をフォローするつもりでそう返信する。

暫く、メールが来ないので、いつまでもうずくまっている訳にもいかず、立ち上がり家に向かって歩き出す。

家の近くの公園の前を通り過ぎようとした時、僕のポケットの携帯が激しく震えだす。

安奈からのメールだと、思った僕はすぐに携帯を出して開いた。

『マサ！ 聞いてくれよ！（以下省略）』

そのメールは、健介からだった。期待はずれもいいところだ。

学校が終わったのに、メールで愚痴を聞かされる何て……。最悪だ。

「ただいま……」

玄関を開きそう言って靴を脱いだ。別に誰かが家にいる訳でもないのに……。

家は両親が共働きで、朝早くに仕事に行って夜遅くに帰ってくる。そのせいか、両親と顔を合わせる事は滅多にない。

一つ下の妹が居る。名前は恵利。

恵利はソフトボール部に入っているため、夕方までは帰ってこない。ため息を吐きながら、階段を上がる僕のポケットでまた携帯が激しく震えだす。

今度こそ、安奈からだど期待を抱きながら、ポケットから携帯を取り出して携帯を開く。

が、それは、健介からだった。

本当にしつこい……。

そんな事を思いながら、健介には適当に返事を返信した。

第十五通 二学期の初日（後書き）

この度、アクセス数が500人を超えました。

読者の皆様ありがとうございます。

こんなに読んでいる人が居るなんて思ってもみませんでした。

あと評価をしていただき、まことにありがとうございます。

メッセージなどいただき、とても嬉しいです。

何かアドバイスがありましたら、お聞かせください。

長くなりましたが、これからよろしくお願いします。

第十六通 ついにやって来た春

九月ももう終わり、十月に移り変わろうとしている。

十月に文化祭のある僕の通う学校では、すでに生徒会を中心に準備を始めていた。

僕のクラスは漫画喫茶をやる事になった。

漫画喫茶なんて、どこの誰が提案したのか。

と、言うか漫画喫茶などやって、人が集まるのだろうか。

そんな不安もあったが、クラスの皆はやる気十分だった。

そして、例の如く僕の前に健介がやって来た。

今日はやけに機嫌がいい。理由は分からないが、いい事があったのだろう。

「今日は、機嫌がいいね」

僕の前の席に座った健介にそう聞いた。

「オオッ！ 分かるか！」

すると、健介は笑いながら僕の肩を叩いた。痛かった。

でも、僕は痛みに耐えながら笑顔を崩さずに頷いた。

「実はな。俺にも春が……」

「来たの？」

健介が言い切る前に僕が言った。その瞬間に健介が拳を振り上げた。

僕は殴られると思い、両腕で顔を覆った。

しかし、拳は飛んでこなかった。ゆっくり腕を下ろすと、健介が笑

っている顔が見えた。

「ど…どうしたの？」

恐る恐るそう聞くと、健介は嬉しそうに語りだした。

「俺も、ついに彼女が出来てな。野球部のマネージャーで、一年生なんだけど……」

聞いていない事まで語りだした。こうなっては、もう止める事は出来ない。

休み時間には、安奈にメールをするはずだったのだが、結局ずっと健介の話を聞かされる羽目になってしまった。

学校が終わると、ドツと疲れが襲い掛かった。

健介が何度も同じ話を聞かせてくるので、昼休みもゆっくり休む事が出来ず、安奈にもメールを送っていなかった。

しばらく、机にうつ伏せで倒れていると、携帯が激しく震えた。安奈からのメールだった。

『今日はどうしたの？ 返事が、なかなか返ってこないけど？』

僕は、今日の出来事を全てメールで送った。

『そっか、同じ話を何度も聞かされる何て、大変ね。』

これから、練習始まるから、暫くメールできないけど、終わったらメールするね』

『うん。わかった』

僕はそう返事を返して、疲れを感じながらも教室を出た。
その夜、安奈とメールのやり取りをして、一日を終えた。

第十七通 アドレスの書かれた紙切れ

安奈とのメールを始めて、早半年がたった。
時の流れと言うのは実に早い。

つい最近二年生になったかと思えば、もう半年が過ぎてもう自分の
進路に向けて、勉強をしている者もいた。

未だ僕の進路は決まっていないが、あんまり気にはしていない。

そんな事を思いながら、席に座っていると、意外な人物が僕に声を
かけてきた。

「あ…あの……」

黒髪を腰まで伸ばした、眼鏡をかけた女子生徒。

身長は僕よりも小さく、ふっくらとした顔つきだ。

僕は彼女の事を知っていた。一応、同じクラスだが、話した事はな
い。

男子から結構人気のある美樹言う名前の女子生徒だ。

彼女のフルネームは篠山 美樹。

僕と美樹の共通点は全く無い。

美樹は僕と違い頭もよく、クラスの人気者。

おとなしい性格だが、眼鏡が似合うとても可愛い娘。

でも、声を掛けられる覚えは無かった。

「な…何？」

あまり、女子と話した事の無い僕は、急に声を掛けられて緊張した。
そんな僕に美樹は一枚の紙切れを渡した。それが、何なのかわから
なかったが、一応受け取った。

手紙では……ないようだが……。

そんな事を思っていると、美樹が頬を赤く染めながら言った。

「わ…私のアドレスです……。よかったら……。メールください…
…」

そう言い残して、美樹は去っていった。

呆然としている僕の周りに、クラスの男子生徒たちが群がり、美樹のアドレスが書いてある紙切れを、奪おうとしていた。

「うわっ！やめろよ！」

僕の叫び声はむなしくかき消され、周りの男子生徒達には届かなかった。

もみくちゃにされながらも、僕は何とかその場を抜け出す事に成功。そのまま教室を出て、トイレに隠れて騒ぎが収まるのを待った。その手の中には美樹からもらった紙切れがしっかりと握られていた。

第十八通 色男？

美樹からアドレスの書いた紙切れを渡され、二日が過ぎた。

まだ、メールは送っていない。

どうするかベッドに寝そべって悩んでいると、携帯の着信音が机の上で鳴り響いた。

着信音で安奈と気付いた僕は、ベッドから精一杯手を伸ばし机の上の携帯を取ろうとした。

が、例の如く僕の視界が一回点し、頭から床に落ちた。

何度も何度も懲りない自分。

そんな事を思いつつ、立ち上がり机の上の携帯を取り開いた。

『最近、ちょっと疲れを感じるんだよね。』

別にマネージャーの仕事が辛いつて訳じゃないんだけど……。』

歳なのかな？（なんちゃって）マサは疲れってどうやって取る？』

『疲れか……。僕の場合は、寝れば疲れなんてなくなるかな？』

まあ、帰宅部だしそんなに疲れないんだけどね（笑）』

確かに、帰宅部の僕はそんなに疲れる事は無かった。

やっぱり、サッカー部のマネージャーをしている安奈は、大変なんだろうと思いつながらメールの返事を待った。

暫く、何気ないメールのやり取りをしていたが、やはりあの事を相談する事にした。

『相談があるんだけど、いいかな？』

『相談？もしかして、恋の相談？』

それなら、私得意だよ（笑）』

恋の相談なんて出来ない。僕は安奈が好きなのだから……。まあ、それは置いて、早速相談をする事にした。

『恋の相談じゃないんだけど……』

実はさ、この前クラスの女子からアドレスを書いた紙をもらったんだけど……。

返事を出すか出さないとか、迷ってるんだよね。どうしたらいいのかな?』

『なーんだ。恋の相談じゃないんだ。つまんないなー。』

それで、何だっけ?メールを送るか送らないかだっけ?

私は送った方が良いと思うよ。きっと、その子マサの事好きなのよ。

キャッ!色男(笑)なんだから』

色男って……。

でも、何だか嬉しかった。色男なんて、この先冗談でも言ってもらえないだろう。

そんな事を思いながらも、何だか切なかった。

安奈にとって、僕はただのメル友で、恋愛の対象に入っていないのだと、実感したからだ。

第十九通 妹に圧倒される兄

安奈に言われた通り、僕は美樹にメールを送ることにした。

しかし、何と送って良いのか悩んでいた。

ベッドに横になり、携帯を片手にずっとため息を吐いていた。

と、その時部屋のドアがいきなり開いた。

びっくりして、僕は飛び起きた。

部屋に入ってきたのは、妹の恵利だった。

お風呂上りの恵利は、パジャマ姿にタオルを頭からかぶっていた。

「な…何？」

部屋の中を見回す恵利に僕は聞いた。

恵利が僕の部屋に入ったのは、多分小学五年の頃が最後だろう。

テーブルを挟んで向かいに座った恵利は、何だか起こっている様子だった。

何故かは、わからなかった。

部屋の中に重苦しい空気が漂った。

そして、恵利がゆっくりと口を開いた。

「お兄ちゃん。何か忘れてない？」

「はい？」

何の事が全く分からなかった。

恵利と何か約束した覚えは無かったからだ。

高校に入ってから、ろくに口も訊いてなかったから、約束なんて無いはずだ。

そんな事を思っていると、恵利が激しくテーブルを叩き、立ち上がった。

あまりの迫力に僕は仰け反り、壁に後頭部をぶつけた。
僕の顔を鋭く睨みつけながら恵利は怒鳴った。

「美樹先輩にどうして、メール送ってあげないの！」

「な…何で……」

『何でその事を知ってるんだ』と、言おうとした時、大事な事を思い出した。

確か恵利は美樹と同じ、生徒会にも属していた。

だから、美樹とも仲がいい。

その事をすっかり忘れていた。

僕の顔を睨みながら、恵利が言葉を続けた。

「アドレス忘れた、教えてあげるから、返事送きなさいよ！」

「いや……。アドレスは分かるよ。アドレス書いた紙持ってるから……」

「それじゃあ、早く送りなさいよ！」

「いや……。僕と美樹さんって、共通点が無いから……。何て送って良いのか……」

完全に恵利に圧倒されている僕は、小声でそう言って恐る恐る恵利を見た。

少し恵利は呆れていた。

「あのね……。別に共通点なんて必要ないでしょ！」

それに、話題は沢山あるでしょ！」

「それは……。そうだけど……」

「全く。今日中にメール送きなさいよ。わかった？」

「……はい」

結局、それしか言い様が無かった。

恵利が部屋を出て言ってすぐ、僕は美樹にメールを送る事にした。
内容は

『メール、送るの遅くなってごめん』

と、一行だけだった。

第二十通 文化祭の準備

——文化祭前日。

一人寂しく教室に残っていた。

外はすでに暗くなっていて、木の葉が宙を舞っている。

漫画喫茶をやろうと、提案した言い出しっぺは、そそくさと帰てくし、こっちはいい迷惑だ。

ただ、ジャンケンに負けたただけなのに、こんな時間まで……。

そんな事を思いながらも、一人作業を進めていく。

作業と言っても、教室の飾り付けと漫画を並べるだけなのだが、一人だと全く進まない。

始めの内は、何人もいたのだが、用事があるなど部活の出し物があるなので、結局僕一人になったのだ。

折り紙の輪を繋げて、鎖状にしていると、ポケットの携帯が激しく震えた。

メールだ。もちろん、安奈からの——。

『ううっ。今日は疲れたよ』（泣）

何で練習試合なんてあるのよ！

でも、明日は休みだし、ゆっくり出来そう（笑）

マサは、明日はどう過ごす？』

作業を止めて僕はメールを打った。

『実は明日文化祭で、今日は一人で居残りです（泣）早く帰りたいよ』（泣）』

『明日は文化祭なんだ。いいな♪

でも、何で一人で居残りなの？ 何か悪い事したの？』

と、すぐにメールが返信されてきた。

そのメールを読んでいる時だった。

別のメールが届いた。

それは、美樹からだった。

『あ…あの……。教室の電気が点いているようですが……。

まだ、文化祭の準備をしているのですか？』

安奈に先に返事を返そうと思っていたが、早めに美樹に返事を返す事にした。

『まだ、飾り付けしてるよ。

でも、もう少しで終わると思うから、明日はお互い頑張ろう（笑）

生徒会の準備頑張れ』

この様な内容で美樹に返信した後、安奈への返事を書いた。

『別に悪い事した訳じゃないよ（泣）

ジャンケンに負けて、それで居残り……。』（泣）

他にも残ってる人が居たけど、皆先に帰って結局一人……。』

作業を再開しようとした時、安奈からのメールが送られてきた。

『大変だね……。』（汗）

それにしても、無責任なクラスだね（笑）

明日は暇だし、マサの学校の文化祭見に行ってみようかな？』

焦った。

安奈が学校に来れば、クラスの皆に安奈とメル友と言う事がばれ

てしまうからだ。

それに、健介に知られたら、どうなるか分からない。
何としてでも、とめなくては……。

そんな事を、思いつつも内心嬉しかった。

安奈が文化祭に来てくれれば、一緒に色々回れるからだ。
色々悩んでいると、メールが届いた。

それは美樹からのメールだ。

安奈と違って、メールを打ち慣れていないのだろう。
結構、返事を送るのが遅い。

そんな美樹からの返事は、

『生徒会の方は、大分準備が済んだんで……。

私もクラスの出し物の準備を、手伝いに行きますね』

何て優しい人なんだろう。

他の連中は、十分もしない内に帰っていったのに……。

生徒会も忙しいのに、こっちの準備を手伝うなんて……。

その後、美樹が教室にやってきて、飾り付けを手伝ってくれた。
この時、僕はすっかり忘れていた。

安奈への返事を返す事を……

第二十一通 文化祭当日

——文化祭当日。

昨日は遅くまで残って飾り付けをしていたが、二人では最後まで終わらせる事が出来ず、朝早くから学校に来ていた。

もちろん美樹も一緒だった。

どのクラスも朝から準備をしている。

まあ、それが普通なのだろう。

それじゃあ、僕のクラスは普通以下？

それはそれで、かなりきつい。

そんな事を考えていると、ため息が漏れた。

「ど…どうしましたか？」

「い…いや……。別に……」

心配そうな顔をしている美樹に微笑んだ。

しかし、物凄く眠い……。

昨日は10時まで残り、家に着いたのは11時ちょっと過ぎだ。

その後、食事を取り、風呂に入って寝たのは結局12時30分。

そんなでもって、起きたのは5時。

睡眠時間は4時間30分。

美樹もその位しか寝てないはずなのに、やっぱりデキが違うのだろう。

そんな事を思いながら欠伸をした。

「あと少しですね」

「——そうだね」

欠伸をしながら僕はそう答えた。
もうすぐ七時になる。

それまでには、飾りつけも終りそうだった。

そして、文化祭が始まった。

僕は午前中に仕事が入っているため、教室に残っていた。

漫画喫茶と言うだけあって、客がいるのに滅茶苦茶静かだ。

しかし、結構な人が入っている。

意外と漫画喫茶もよかったのかも知れないな。

「雅之。コーヒーの注文だ」

「はい」

ウェイトレスの女子生徒が僕にそう言って紙を渡した。

僕は殆ど裏方で、注文された品を作っただけ。

だが、裏方は今僕独りしかない。

他の連中は全員サボりだ。

僕はコーヒーを入れてウェイトレスの女子生徒に渡す。

この時、僕の携帯が激しく震えた。

だが、注文が次々と入るため、中々携帯を見る事が出来なかった。

暫く続いた注文もようやく無くなり、裏方の仕事になった。

僕は、椅子に座り携帯を見た。

メールが届いている。

それも、安奈からのメールだ。

『来ちゃいました』

タイトルにそう書いていた。

そのタイトルを見た瞬間、何か嫌な予感がした。そして、その嫌な予感は的中した。

『実は今、マサの学校らしき所に来てます。

アレからメールの返信が無かったから、結構探すのに苦労したよ
(泣)

それでさ、マサの教室ってどこかな?』

正直驚いた。

メールを読み終わったあと、携帯を落としてしまった。その音は静かな教室内に響き渡る。

「ちょっと。なにしてんのよ」

ウェイトレスの女子生徒がそう言って僕の方にやってきた。すぐに携帯を拾った僕は、笑いながら答えた。

「な、なな何でも……」

物凄く焦った。

「それなら、いいけど。一応、仕事中なんだから、携帯はいじるなよ。」

私達だって我慢してんだから」

「は、はい……」

僕がそう言うウェイトレスの女子生徒はいってしまった。メールが届いたのは、一時間くらい前だったが、一応返事を返した。

『返事遅れてごめん。』

今、仕事中で中々、携帯見る事出来ないから……。暫くしたら、休憩入ると思うから、その時メールするよ』

とメールを送るとすぐに返事が返ってきた。

『仕事中だったの。ごめんね。』

それじゃあ。休憩時間になったらメールしてね』

僕は早く休憩時間が来ないかと、何度も時計を見ていた。

第二十二通 お似合いのカップル

午後に入り、ようやく休憩に入った。

安奈が学校に残っていると言う保障は無いが、一応メールを送った。

『やっと休憩に入りました。

もしかして、もう帰っちゃった？』

メールを送った後、僕はすぐに教室に出た。

そんな僕の前にあの男が現われた。

とっさに背を向けて逃げようとしたが、その男にすぐに捕まってしまった。

「おい！ 何で逃げようとするんだ！」

「べ、別に逃げようなんて……」

僕はゆっくり振り返り微笑んだ。

もちろん作り笑いだった。

ついでに、その男とは言うまでも無く、健介だった。

「まあいいや。お前、今休憩時間だろ。野球部に来い」

「エッ、でも……」

「何だ？ 俺の誘いを断るのか？」

ボキボキと、指を鳴らして僕を睨む健介。

まるで、ドラ●もんに出てくるジャ●アンの様だ。

結局、断る事が出来ず、健介に連れられ野球部に向った。野球部は的当てをしていた。

そんなのに、全く興味はなかったが、結構いい景品があると言う事で、客も沢山来ていた。

「それじゃあ。俺はやる事あるから、お前はちゃんと並んでろよ。もし、途中でいなくなったら、後で痛い目見るぞ」

「う…うん。わかってるよ」

僕の返事を聞くと鼻歌を歌いながら健介は去っていった。すでに、携帯には安奈からのメールが届いていた。

『まだ、帰ってないよ。まだ、見てない所とか一杯あるから。』

それにしても、お腹空いたな。と、言うわけで一緒に昼食でも食べようよ。

私、校門前で待ってるからね』

どうするか迷った。

ここを離れば、健介に後で何をされるか分からない。

だが、校門前で僕を待っている安奈。

結局、僕の出した結論は、安奈の所に行くと言う事だった。

校門前には、確かに安奈がいた。

ただし、一人ではない。

他に一人の男がいた。

僕と違い、顔立ちもよく、背丈も高い。

簡単に言うと、モデルの様な感じだ。

そんな男と安奈が楽しげに話をしていた。

何か声掛けにくいし、お似合って感じ――。

僕は暫く動けなかった。

そんな僕に気付いた安奈が手を振って声をかけた。

「あつ、マサ」

「マサ？」

男が僕の方を見る。

そして、微笑みながら言った。

「マサって、ユキの事だったのか」

「和彦君、マサと知り合い？」

和彦。

確かに、僕は彼を知っている。

と、言うかこの学校で彼を知らない者はいない。

名前は白羽しろは和彦かずひこ。

彼は学園一カッコよく、頭もよく、スポーツ万能。

非の打ち所がない、完璧な男だ。

和彦とは一年の時同じクラスだった。

とても優しく、リーダーシップもあった彼は、よく僕の事を気に掛けてくれた。

僕が健介にいじめられてるんじゃないかと心配してくれた。

そんな和彦は僕にとって、憧れの人物像だった。

「ああ、一年の時に同じクラスでな。

って言うか、俺的には鈴木がユキと知り合いだって事が、びっくりだぞ」

「エヘヘッ。ちよつとね」

白い歯を見せながら安奈はそう言った。
この二人の間に入っちゃいけない気がした。

第二十三通 幕を閉じた文化祭

校門前で楽しげに話す、安奈と和彦。

二人がどういう繋がりなのか気になった。

もしかすると、付き合っているとか――。

あり得るかもしれない。

学校一カッコいい和彦なら、安奈と付き合っているもおかしくない。そんな事を思っている僕に、和彦が笑いながら言った。

「俺と鈴木は同じ中学でさ」

「同じ中学……。そ、そうなんだ」

何だか、安心した。

ただ同じ中学で――。

同じ中学！？　なら、なおさら付き合っている可能性があるじゃないか。

色々な事が脳裏を過り、物凄く不安になった。

その時、大勢の女子生徒の歓声が聞こえた。

多分、和彦に向けられた歓声だろう。

「ヤバッ！　それじゃあ、俺はこれで」

右手を顔の横で軽く振って走り去っていった。歓声と沢山の足音が、彼の後を追って行った。嵐が去っていったかの様だった。

「やっぱり、和彦君はモテモテだね」

安奈はそう言って僕の方を見ながら微笑んだ。
僕もとっさに相槌を打った。

「そ、そうだね」

結局、安奈と和幸が付き合っているのか聞く事が出来なかった。
僕と安奈は屋台で買った焼きそばを食べていた。

「うーん。ちょっと味が薄いかな」

焼きそばをすすりながら、安奈はそう言った。
確かに味は薄く、正直あまり美味しくなかった。
こんな物でよくお金をとるな。

しかも、300円。

これなら、自分で作った方がまだましだ。

不味い焼きそばを食べ終えた、僕と安奈は口直しに生徒会の作る豚汁を食べに、中庭に移動した。

流石に沢山の客がいて、中々豚汁に辿り着く事が出来なかった。

「結構、行列だね」

「そうだね。どのくらい並ぶかな」

「時間かかりそうだね」

行列の先を見据えながら安奈はそう言った。
暫く並んでいたが、中々列は前に進まなかった。

「中々、進まないね」

「そうだね。豚汁は諦めようか？」

「うーん。そうね。折角だけど、今回は諦めようか」

僕と安奈が列から出たときだ。

背後から名前を呼ばれた。

その声で誰かは大体察しはついた。

「倉田君」

僕はゆっくりと振り返った瞬間、目と目が合った。

そこに居たのは、やはり美樹だった。

不思議そうな顔で安奈が僕の顔を見ている。

エプロン姿の美樹が、僕の方に歩み寄ってきた。

「豚汁を食べに来たんですか？」

「ええ……。でも、列進まないんで、他に行こうかと……」

「そうですか……。残念です」

美樹はそう言ってチラッと安奈の方を見た。

ここはちゃんと紹介した方がいいだろう。

そう思い僕は、安奈を紹介する事にした。

「僕のメル友の鈴木 安奈」

「マサのメル友の鈴木 安奈です。よろしくね」

明るい声で安奈はそう言って美樹に微笑みかけた。
そして、安奈に美樹を紹介した。

「同じクラスの篠山 美樹」

「篠山 美樹です」

複雑そうな顔で美樹はお辞儀をした。

その後も、色々と話をしたがよく覚えてはいなかった。

「それじゃあ、私はまだやる事がありますから」

「頑張ってね」

お辞儀をした美樹に、安奈はそう言って胸の前で右手を軽く握りガツポーズをした。

僕は彼女に微笑んで手を振った。

僕と安奈は色んな屋台を見て回った。

こうして、文化祭は幕を閉じた。

その後、僕は的当てをしていない事がバレ健介に殴られたのは言うまでも無かった。

第二十三通 幕を閉じた文化祭（後書き）

今回、『間違いメール』が、総アクセス数で1000人を突破しました。

驚愕です。まさか、こんなにもアクセスしてくれてる人がいるなんて……。

嬉しい限りです。苦手だと思っていたジャンルで予想外のアクセス数。何だか、色々と舞い上がってます。

それから、評価の方をしてくださってありがとうございました。

これからも、ベタな恋愛にならない様、頑張って書いていくので、応援の方をよろしくお願いします。

第二十四通 健介の考え

文化祭が無事に終わり、十月に残されたイベントは中間テストだけだ。

結局、僕は安奈と和彦が付き合っているのか、わからないままだった。

学校の授業は、すでにテスト勉強となっているため、アチコチから教えあっている声がある。

一応、僕も勉強をしている。

流石に今回赤点だと、まずい気がしたからだ。

数学の教科書を開き、暫く数式を見ていた。

そこに、いつもの様に健介がやってくる。

健介は僕の前の席に座り、何も言わず僕の顔を見ている。

何も言わないと、言うのがまた怖かった。

だから、僕の方が先に声を掛けた。

「どうかした？」

その僕の言葉を待ってましたと言わんばかりに、健介が満面の笑みを浮かべている。

何かとても嫌な予感がした。

僕の顔は自動的に引きつった笑顔になっていた。

そんな僕に健介がゆっくりと口を開く。

「実はな。お前に頼みたい事があるんだ」

「た、頼みたい事？」

声が少し震えたが、健介は気付いていない。

「ああ。お前にしか頼めない事だ」

「ぼ、僕にしか、頼めない事？」

更に声が震えたが、やはり健介は気付かない。

そして、話は本題に入ったが、それは結構意外な事だった。

「と、言う訳で、今日はお前の家で勉強会だ」

「別に構わないけど……」

「何だ？ 言いたい事でもあるのか」

健介はそう言って僕の顔を見ている。

言いたい事はあるが、中々言い難い事だった。

だが、僕は意を決して言った。

「ぼ、僕も健介も成績悪いじゃない……」

「そうだな。それが、どうした？」

「だから……その……。勉強にならないんじゃないかな？」

「ンッ？ それ、どういう意味だ？」

睨みをきかせながら、指の骨を鳴らしながら健介がそう言う。

恐怖で唇が震えたが、僕はさらに言葉を続けた。

「いいいや……。お、おお教える人が、いないと……。べ、べべ勉強にならないんじゃないかなって」

僕のその言葉に健介は「うーん」と唸り声を上げながら考えていた。

そして、暫くして出た言葉が、

「大丈夫だ。俺の彼女呼ぶからさ」

だった。

呆れて言葉も出なかった。

その理由は健介の彼女の学年にあった。

健介の彼女は確か、野球部のマネージャーの一年生だったはずだ。僕は二年生で、一年生がどうやって二年生に教えるというのだ。とりあえず、出たのは深いため息だけだった。

第二十五通 三人だけの勉強会

僕の部屋は静まり返っている。

しかも、重い空気が立ち込めている。

そんな中、健介が僕の耳元で囁いた。

「おい……。なんでこいつがいんだよ」

こいつとは、和彦の事だった。僕が誘ったのだ。

和彦は僕の誘いを快く了承して、勉強会に参加しているのだ。

結局、健介の彼女はこれなくなり、僕と健介と和彦の三人で勉強会をしている。

「だって、和彦は成績いいから……」

「だからってな！」

健介は和彦の事が苦手だ。

一年の時に色々あったため、それ以来和彦の事を避けていたのだ。そんな和彦が僕と健介の方を見て軽く微笑み口を開いた。

「何？ どこか分からない所でもあった？」

「ううん。何でも無いよ」

僕は苦笑いをしながら首を横に振った。

すると、和彦が笑顔でまた口を開いた。

「わからない所があったら、何でも俺に聞いていいからさ」

何て爽やかな笑顔だ。

女子生徒がキャーキャー言う理由が分かった気がした。

とりあえず、僕と健介は自分のノートに向い合った。

時計の時を刻む音とノートにペンが走る音だけが、部屋の中に響いていた。

そんな時だ。

「ただいまー」

と、妹の恵利の声が玄関の方から聞こえた。

そして、二人の女子生徒の声も微かに聞こえた。

「恵利の家、誰もいないの？」

「本当、静かですね」

その声は静かな廊下を通り、僕の部屋まで丸聞こえだった。

「恵利ちゃんが友達連れて帰ってきたようだぜ」

「恵利も勉強会でもするのかな？」

「それなら、俺達も混ざらないか？」

健介が楽しそうに笑いながらそう言ったが、僕としてはあんまり混ざりたくは無い。

そんな僕の気持ちを察したのか、和彦が健介に言った。

「俺としては、混ざりたくは無いな。向こうの勉強の邪魔になるかもしれないからな」

「別にお前は混ざらなくていいじゃないか。俺とマサは混ざってくるから」

健介はそう言って僕の肩に腕を乗せる。

和彦の目が僕に正直に言った方がいい。と、言う目をしていた。
だから、僕は正直に言った。

「ぼ…僕はいいよ。恵利達の邪魔しちゃ悪いし……」
「何だよ……。なら、俺もいいわ」

ため息を漏らしながら健介はそう言った。
物凄く落ち込んでいたが、暫くしたら真剣に勉強に取り組んでいた。
何だかんだ言って、結構健介と和彦は仲がよいような気がした。

第二十六通 眠気とメール

勉強会が終わり、健介と和彦が帰った後も、僕は机に向っていった。

その時、僕の机の上に置いていた携帯が激しく震えだした。いつもは、家に帰ってきてすぐにマナーを解除するのだが、今日は健介と和彦がいたのでマナーを解除するのを忘れていた。携帯を開くと安奈からのメールが何通か届いていた。

そのメールを全て読み、先程届いたメールを読んだ。

『おい。マサー。寝てるのか？
起きてたら返事、返してね』

僕はすぐに返事を返す事にした。焦って何度も打ち間違いをしてしまい、何度も打ち直していた。

『ご、ごめん。もうすぐ中間テストがちかいからさ。
僕の家で勉強会してたんだ。だから、メール届いてるの気付かなかったんだ』

僕の謝罪メールにすぐに安奈からの返事が届いた。

『な〜んだ。そうだったの。』

私こそごめんね。そんな事とは知らないで、何通もメール送って……。

もしかして、今も勉強中だった？ だったらごめんね』

『別に、安奈が謝る事無いよ。
すぐに返事を返さなかった僕が悪いんだから』

と、僕は安奈に気にしない様にメールを送った。ノートにペンを走らせていると、また携帯が激しく震えた。もちろん、安奈からのメールだ。

『それじゃあ。私はマサの勉強の邪魔しないように、今日は静かに読書をしたいと思います。』

と、言うわけで、今日の所はおやすみなさい。勉強頑張ってね』

このメールを見た瞬間、やる気がグッと湧いてきた気がした。

ノートにペンを走らせ、数学の数式を覚え（どれがどの数式かわからない）、歴史の暗記を行い（色んな年の出来事が、ゴチャゴチャになっている）、英語の英単語を覚えた（読み方が分からない）。色んな事を頭に入れたせい？ か、何だか急に眠くなった。

そして、いつの間にか僕は机にうつ伏せになって眠っていた。

僕が目を覚めたのは、それから十分後だった。

机の上で携帯が激しく震えているのに気付いたからだ。とりあえず、携帯を見るとメールが届いていた。

『マサ！ まだ、寝ちゃ駄目だよ。』

しっかり、勉強して赤点から脱出だ。ガンバ』

僕が眠っているのが分かったのか、そんなメールが安奈から届いた。段々、安奈が僕の性格を理解してきたようだ。

僕は頬を両手で思っきり叩き、眠気を吹き飛ばした。頬は赤く手の平の後が残っていた。

その後も、何度も眠気が襲ってきたが、そのたびに頬を真っ赤にして眠気を吹き飛ばしながら、テスト勉強を進めていったのだった。

第二十七通 乗り越えた中間テスト

中間テストが無事に終了した。結果の方はまだわからないが、とりあえずやるだけの事はやった。そう思いながら僕は、自分の席でうつ伏せになっていた。

すると、ポケットで携帯が激しく震えた。多分、安奈からのメールだろう。僕はそう思いながら携帯を、ポケットから取り出した。案の定、安奈からのメールが届いていた。

『確か、今日でテスト終わりだよな？ どう赤点は免れそう？』

暫く考えてみたが、赤点をとらない自信は無かった。と、言うか全て赤点をとるんじゃないか、と言う不安で押しつぶされそうだった。

『いや……。微妙だね……。多分、赤点をとると思うね(笑)』

疲れ切った(テストで)体で、ゆっくりと返事を打ち送信した。数分後、すぐに安奈からのメールが届いた。

『何か、疲れ切ってるって感じだね？ って言うか、もっと自信もってよ。』

一生懸命やったんだから、きっと成果は出るはずだ』

このメールで、何となく気持ち became 楽になった(気がした)。メールを見て気付かなかったが、いつの間にか僕の前の席には、いつもの様に健介が座っていた。

それに気付いた僕は、驚いて椅子まま後ろに倒れてしまうかの、勢いで仰け反った。

「何、ニヤけてるんだ？」

「エッ？」

僕は気付いてなかったが、僕は安奈からのメールを見ながら、自然と顔が綻びニヤけていたのだ。健介に言われて気付くなんて……少し気が緩みすぎていた。

そんな事を思いながら、携帯を閉じてすぐに机の中にしまった。

「そ、それで、何の用？」

焦りながら僕は健介にそう言う。深刻そうな顔をしながら、健介がため息をついた。何があったか分からないが、こう言う時友達なら相談に乗るべきだろう。

「どうかしたの？」

「ああ、実はな……」

意味深に言葉を詰まらせる健介。僕は息を呑み、喉を鳴らした。ゆっくりと健介の口が開き、言葉を発した。

「実は、お金貸してほしいんだ」

「エッ？」

流石に愕然とした。あんなに深刻そうな顔をしていたから、てっきりテストの心配かと思えば……よく考えれば、分かる事だ。健介はテストなんて、気にするようなタマじゃない。

深いため息をことしたが、健介には聞こえていない。

「それでさ。五千円なんだけど……」

「五千円! ? 五千円も持ち歩くわけ無いじゃない」

「何だよ。貧乏人」

健介はそう言い残しその場を後にした。

その貧乏人にお金を借りようとしたのは、どこのどいつだと、思っていたが絶対に口が裂けても、そんな事は言えない。言えば確実に殴られているからだ。そんなこんなで、テストは終わった。

その後、テストは返却され、何とか僕は赤点を出す事無く、中間テストを乗り切ったのだった。

第二十八通 季節の変わり目

中間テストを無事乗り切った、僕はベッドに横になって漫画を読んでいた。

最近、テスト勉強や文化祭準備などで、ゆっくり漫画を読む機会がなかったため、それがとても新鮮に感じていた。

そんな時、机の上で携帯の着信音が響き渡る。安奈からのメールだ。

そう思いながら、漫画をその場に伏せると、いつもの様にベッドから手を伸ばした。そして、いつもの様にベッドから、逆さまに落ちた。

凄く鈍い音が辺りに響き、隣の部屋から恵利の声が響いた。

「お兄ちゃん！ 凄い音したけど、大丈夫？」

「ああ、大丈夫。ちょっと、ベッドから落ちただけだから」

僕はそう返事を返して、携帯を開いた。

『うーっ……。辛いよ。実は、今日風邪で寝込んでます……。とつても苦しくよ。折角の休みなのに……。』（泣） 気持ち悪いよ』

風邪か……。確かに、もう11月と言うだけあって、結構外は冷え込んでいる。

僕も風邪を引かない様に気をつけないと、と思いながらメールの返事を送った。

『風邪か……。季節の変わり目は、風邪を引き易いからね。でも、メールしてて大丈夫なの？ ゆっくり寝てた方がいいって』

暫くメールの返事は無かった。寝たのかと思いい机に携帯を置いて、ベッドに横になって天井を見上げていると、また携帯の着信音が鳴り響いた。安奈からのメールだ。

僕は急いでベッドから手を伸ばしたが、結局ベッドから逆さまに落ちた（本日2度目）。

「ちょっと！ 今度は何？」

恵利の声が隣から響く。流石に何度も、ベッドから落ちたと言うのは、変かと思いでた言葉は、

「本棚が倒れた！」

だった。我ながら最悪な言い訳だ。本棚が勝手に倒れるはずがないのだから……。その後、恵利の声が聞こえなくなり、代わりに隣の部屋から音楽が鳴り響いていた。

まあ、何はともあれ、安奈からのメールを見る事にした。

『ありがとう。今日はゆっくり、休みます……。元気になったら、メールするね……。マサも風邪には気をつけて』

流石にこの後、安奈に返事を返したらまずいと思い、そのまま携帯を机の上においてベッドに座った。

読んでいた漫画の事など忘れ、安奈の事が心配でたまらなかった。早く、安奈の風邪が治る事だけを、考えていた。

第二十九通 寒い朝

今日は寒くてなかなか、起きる事が出来なかった。風で窓がガタガタと揺れ、隙間風が入ってきていた。

布団からなかなか出れないでいると、頭の上で携帯が着信音を、発しながら激しく震えていた。着信音ですぐに安奈からのメールだと気付いた。

暫く、風邪でダウンしていた安奈だが、もうすっかりよくなったと言っていた。実際、どうなのかはメールでは分からない。

とりあえず、布団からゆっくり手を伸ばし、携帯を取り安奈からのメールを見た。

『ヤッホーッ！ 今日朝からハイテーションです。なぜかと言うと、今日は私の誕生日なんですネ♪ 私もついに17歳に、大人に向って一歩前進♪』

そのメールを見て僕は飛び起きた。初耳だった。今日が、安奈の誕生日なんて、全く知らなかった。プレゼントとどうしようと、思ったがよく考えたら、僕と安奈は別に付き合っているわけじゃない。少し気落ちしながら、安奈への返事を送る事にした。

『誕生日おめでとう。そっか今日が、安奈の誕生日だったのか……。全然知らなかったな』

僕はそう返事を返して、洗面所に向った。洗面所から戻ってくる、すでにメールが返信されていた。

『あれ？ 教えてなかったっけ？ 確か教えた覚えがあったんだけど……。私の勘違い？ やっぱ、歳かしら？ 物忘れが激しいわ』

（笑）
』

メールを見ながら笑みを浮べて、僕はすぐに返事を返した。

『歳って……（汗） 17になったばかりじゃないか……』

メールを送信すると、僕は制服に着替えて1階に下りた。リビングに行くのと、いつもの様にテーブルの上に、朝食がラップを置いてあった。

恵利は朝食を食べ始めていた。

「おはよう。お兄ちゃん。今朝はいつも以上に遅かったね」

「まあ、こうも寒いとな……」

「もっと体鍛えたら？」

ため息を吐きながら、恵利はそう言って冷たい視線を送ってきた。流石にこれには凹んだ。

気落ちしながら、僕は朝食を食べた。

朝食を済ませ部屋に戻ると、安奈からのメールが届いていた。

『そうだよね。17になったばかりかだもんね。まだまだ、若いよ（笑）それじゃあ、今日も一日頑張ろう！』

そのメールに僕はすぐに返事を返した。

『それじゃあ、また後でメールしようね』

部屋でそれを送信し、すぐに鞆を持って玄関に向った。今日は朝から調子がよさそうだった。

第三十通 登校

足取りも軽く、僕は学校へと向っていた。朝だけあってか、何台もの車が僕の横を横切っていた。

住宅が建ち並ぶ道を歩いていると、目の前のわき道から美樹が出てきたのが見えた。美樹も、僕の事に気付き立ち止まっている。

「おはようございます」

「おはよう」

頭を下げる美樹に、僕は軽くそう言って微笑んだ。学校に行く時に、美樹に会うなんて滅多にない。実際、僕がこんな早く家を出る事が珍しいからだ。

「美樹は、いつもこの時間帯に学校に？」

「ええ。早めに学校に行って、草花に水をやるので」

「大変だね。生徒会って、そんな事までやってるんだ」

「いえ。これは、私の日課なんです」

穏やかな笑みを僕に見せながら美樹はそう言った。日課で学校の草花に水をかけるなんて、凄く優しい人なんだな、と思っていた。

「今日は寒いですね」

突然、美樹がそう言った。やっぱり、沈黙が続くのが嫌だったのだろう。僕は何て、気の利かない奴なんだ。そう思いゆつくりと、肩を落としながら返事をした。

「そうだね。もう、11月だから」

「そうですね。時は進むのが早いですね」

「もうすぐ二学期も終るし、あっという間だね」

「そうですね……」

そう言って美樹は寂しげな瞳で前を見ていた。

確かに時が進むのは早い。つい最近、二年に上がった気がしていたが……。そう感じるようになったのは、安奈とメールを始めてからだ。

楽しい事は時が過ぎるのが早いと言うが、まさにその通りだと思った。

「倉田君は、進路とかどうするんですか？」

突然の質問に、僕は驚きつつもその質問に答えた。

「し、進路はまだ、決めてないよ。美樹は、やっぱり大学行くの？」

「父も母も、それを望んでますが、私は……」

急に美樹が口ごもり、深刻そうな表情をしていた。その口ぶりからすると、親は大学に行ってほしいが、美樹は他にやりたい事があるという感じだろう。だが、僕は深く聞かない事にした。美樹も、話したくないだろうし、話を聞いた所で僕には何も出来ないからだ。その後、何気ない会話をしながら、僕と美樹は学校に向った。

第三十一通 昼休み

授業中、僕は安奈の誕生日の事を考えていた。

今日が誕生日だと言う事がわかったが、やはりプレゼントはあげたいと思ったのだ。しかし、彼女がどこに住んでいるのか、分からないためどうしたものか、考えていた。

そんな僕の頭に、一人の人物が浮かび上がった。それは、和彦だ。和彦は安奈と同じ中学だったから、安奈の通う高校とか分かるはずだと、思ったのだ。

僕は、昼休みに和彦を呼び出した。

「珍しいね。ユキが俺と昼食をとるなんて」

和彦は笑いながらそう言って、箸を口に運ぶ。流石に、切り出し難かった。安奈と付き合っているかもしれないと、思っていたからだ。そんな僕に、和彦が口を開いた。

「もしかして、鈴木住所が知りたいとか？」

「エッ!？」

「分かりやすいよな。ユキは」

和彦はそう言って笑ってみせる。多分、僕の安奈に対する気持ち、すでに悟っていたのだろう。いつから、ばれてたのか分からないが、やっぱり和彦は凄いと思った。

「鈴木住所教えるのはいいけど、結構遠いぞ？」

「そ、そうなの？」

「ああ。実家は近いけど、今は高校の寮で生活してるらしいからな」
「そうなんだ……」

「まあ、そんなに気を落とすなって、プレゼント渡すなら今から行った方がいいぞ」

そう言って和彦は笑った。和彦は僕の恋を応援してくれているようだ。何だか、嬉しかった。

「ありがとう。でも、授業もあるし……」

「授業より、恋の方が大切さ。一度チャンスを逃せば、もうチャンスは回ってこないぞ」

「そうなのかな？」

「そうだって。授業なら、後で俺がノートかしてやるからさ」

和彦は僕の背中を叩いてそう言った。気持ちはとてもありがたいが……、僕と和彦は違うクラスなのだ。まあ、その事は言わずに気持ちだけを受け取った。

「ありがとう。わかったよ。行ってみるよ」

「よし、それじゃあ、これが寮のある場所だ。行って来い」

「うん。行っってくるよ」

僕はそう言って、和彦に手を振りながら学校を後にした。後先も考えずに、学校を飛び出したが、肝心のプレゼントを買ってない事に後になって気付いたのだった。

第三十二通 緊張の瞬間

僕は電車の中に居た。

その理由は、安奈に誕生日プレゼントを渡すためだ。だが、僕は電車に乗ってから気付いた。プレゼントを買っていない事に――。

電車は案外空いていて、僕は座席に座る事が出来たが、その肩は落ちて暗い雰囲気を辺りに撒き散らせている。実は僕は物凄く乗り物に弱かった。

プレゼントを買ってない事もあったが、電車に長時間揺られて、体が悲鳴を上げ始めていた。

「ううっ……」

気持ちが悪く、物凄く吐き気がする。胸がムカムカして、何度も吐きそうになるが、それを何とか耐えていた。

電車に揺られて1時間が過ぎ、ようやく目的の駅に辿り着いた。

その時には、足取りも重く頭がズキズキと痛んでいた。帰りも電車に乗ると思うと……。

まあ、そんな事はいいとして、僕は携帯を開き時計を見る。すでに、3時になるうとしていた。プレゼントを買いに行っている時間があるだろうか。そんな事を、考えていたが足は自動的に、和彦の教えてくれた安奈の寮の場所に向っていた。

足が進むにつれて、緊張していった。心臓は鼓動を強めていく。自分が何を考えているのか、全く分からなくなった。気付いた時には、安奈の住む寮の前に立っていた。

寮に入っていく女子生徒達は、僕の顔を見て首を傾げて口を押えながら笑う。何がおかしいか分からなかったが、多分僕の顔が緊張で強張っていたのだろう。きっと、それがおかしかったのだと思う。暫くして、安奈の声が僕の耳に届く。その声は明るく暖かみのあ

る声だった。

「マサ!? エッ、どうしたの? こんな所まで」

「いや……。誕生日だって、言ってたから……」

「そうだけど、学校どうしたの?」

不安そうな顔をしながら、安奈はそう言った。

僕は初めて見た、安奈の制服姿に見とれていた。そのおかげで、頭をバグで引っ叩かれた。

「ねえ、聞いているの? マサ」

「き、聞いているよ……」

「もう……」

呆れ顔で安奈はため息を吐き、僕に微笑みかけて言う。

「それじゃあ、私の部屋行こうか。ここで、立ち話もなんだし」

「エッ!? で、でも……」

「私の部屋じゃ、不満?」

「いや……そんなつもりじゃ……」

まさか、こんな展開になるなんて、思っても見なかった。頭の中が真っ白になり、心臓の強い鼓動だけが、聞こえていた。

第三十二通 緊張の瞬間（後書き）

今回、早くも総アクセス数が2000人を突破しました。

僕としては、前代未聞の事でまだ信じられません。評価などもないだき、ありがたいかぎりです。

これからも、頑張っていくので、感想や指摘などがありましたら教えてください。

これからも、よろしくお願いします。

第三十三通 安奈の部屋

初めて女の子の部屋に入った。

とてもいい香りがして、清潔感のある部屋だった。いたる所にぬいぐるみがあるのが、また女の子らしいと思った。

僕はテーブルの前に、緊張しながら正座をして座っていた。

安奈は僕の事など、全く気にしていない様子だった。

「マサは、何か飲む？」

「ぼ、僕はいいよ」

「遠慮しなくていいよ」

「で、でも……」

「もう……。ハッキリしないな」

「ごめん……」

とりあえず、謝った。安奈は微笑みながら、冷蔵庫からオレンジジュースを取り出した。

「それじゃあ、オレンジジュースでいいよね」

「う……うん……」

嬉しそうにコップを2つ取り出して、僕の向かいに安奈は座った。そして、オレンジジュースをコップに注ぐ。オレンジジュースを注ぎながら、安奈は不思議そうに僕に訊いた。

「ねえ、どうして私がこの寮に居るのわかったの？ 教えてないよね」

「う、うん。和彦に聞いたんだ。どうしても、プレゼント渡したくて……」

「プレゼント？」

首を傾げながら安奈は僕の事をジッと見る。僕は申し訳ない気持ちで一杯だった。もちろん、プレゼントを買っていないからだ。

何とか、言い訳をしようと思ったが、やっぱり正直に言う事にした。

「ごめん。プレゼント……」

「いいの。別にプレゼントが欲しくて、マサに誕生日だって教えたんじゃないんだから。ただ、祝って欲しかったただけだから」

そう言って安奈は、僕に優しく微笑む。僕も少しは気持ちが楽になった。

「でも、来年はプレゼント欲しいな」

「わ、分かってるよ。来年は、絶対買っておくから」

甘える様な声でそう言った安奈に、僕は戸惑いながらもそう言った。まるで付き合っている様だった。プレゼントは買い忘れたが、安奈に会いに来てよかったと思った。

僕と安奈は楽しい会話をして、時を忘れていた。気がついた時には、外は真っ暗になっていた。

「そろそろ、僕帰るよ。今日は、プレゼントごめんね……」

「もういいよ。来年は、お互いに誕生日プレゼント用意しようね」

「うん。それじゃあ、またメールするね」

「待ってるから」

僕は微笑む安奈に手を振り、安奈の寮を後にした。

その後、僕は苦手な乗り物（電車）に、1時間も揺られ、吐きそ

うになりながら家に帰ったのは、言うまでも無いだろう……。

第三十四通 時の流れ

時は流れ、11月も終わろうとしていた。11月は特に目立った行事も無く、アツと言う間に過ぎた。そして、待っていたのは期末テストだった。

つい最近中間テストをやった、ばっかりだというのに……。全く、時と言うのは進むのが早い。教室の中は、やたらとピリピリしている。この雰囲気は僕は苦手だった。流石の健介も今回は、真面目に勉強をしていた。野球部の顧問に、テストの成績が悪い事がバレたらしい。

まあ、そのおかげで、今は平和に過ごせるのだが、今にとんでもない事を言い出すに違い無い……。そう思いながら、机にうつ伏せになっていると、やはり奴の声が僕の前の席で聞こえた。

「うがー！ーっ！ マサ！」

その声に、顔を上げると目の前に、血走った目の健介の姿があった。それに、驚き僕は仰け反り、そのまま床に倒れた。その勢いで、床の後頭部をぶつけて一瞬、危うく気を失いそうになった。

椅子を起こして、僕は頭を摩りながら椅子に座った。冷たい視線が、僕の体を突き刺していた。僕は、周りを気にしながら、健介の方を見た。

「ど…どうしたの？」

「駄目だ！ 全然、頭にはいらねえー」

恐る恐る口を開いた僕に、健介は大声でそう言った。また、クラスの見線が僕の所に集まる。僕が悪い訳じゃないのに、皆の見線が僕が悪いと言わんばかりに、突き刺さる。

「け：健介、もう少し小さい声で……」

「俺は、どうすればいいんだー。教えてくれー」

健介に僕の声は届いてなかった。周りの皆には申し訳ないが、こ
うなった健介は僕には止められない。

「こうなったら！」

「こうなったら？」

「カンニングするぞ」

「か、カンニン…!？」

急に小声で健介はそう言って、僕が驚きの声を上げようとするの
を遮った。また、とんでもないことを言い出した。それに、巻き込
まれる僕の身にもなって欲しい……。

その後、何とか説得して、カンニングは取り止めになったが、健
介が赤点を取らない様に、僕の家でテストまで勉強会をする事にな
ってしまった……。これじゃあ、暫く安奈とメールが出来そうに無
かった……。

第三十五通 勉強会？

とても重い足取りで、僕は帰路についていた。その横には、アホみたいに笑う健介の姿があった。色々とあり、今日から僕の家で、勉強会をする事になった。

安奈からメールが届いているが、返事を返す事が出来ないでいた。

「ねえ……。もうちょっと、静かに出来ない？」

「ナハハハハッ。何言ってるんだ。俺は静かにしているぞ」

「ハハハ……。そうなんだ」

そう言うしかなかった。もう何を言っても、聞いてくれないだろう。と、言う事で僕は何も言わずに、歩き続けていた。うるさい健介の横を歩いていると、周りの目がこっちに向き、とても恥ずかしい。

そんな事を、気にしていない健介が、信じられなかった。

僕の家に着くと同時に、健介が発した言葉は、

「なあ、腹減った。何か食わせろ」

だった。遠慮と言うものを知らないのだろうか。ため息だけが、毀れた。

まあ、とりあえず黙って貰う為に、僕はキッチンに立った。冷蔵庫にある物で、何を適当に作る事にしたのだ。だが、なぜ人の家でご飯を食べようとするのか、理解できなかった。

「なあ、まだか？」

「まだかつて……。そんな簡単に作れないよ」

「それじゃあ。俺、テレビ見てるから、出来たら持ってきてくれ」

そう言って、健介がテレビをつけたのが分かった。全く、僕は健介の奴隷じゃないんだぞ。文句も言えず、僕は冷蔵庫にあったもので料理を作る事にした。

暫く何を作るか悩んだが、結局炒飯を作る事にした。一番、作るのが楽だからだ。材料を適当に切り、フライパンで炒め、そこにご飯を入れた。後は適当に味付けし、適当に皿に盛り付けた。名づけて適当炒飯。

それを、健介に持っていくと、すぐに喰らいついた。そんなに、お腹が空いていたのだろうか、疑問が生まれたが口にはしなかった。

「いやゝ。お前、料理だけは上手いな」

「それより、食べたなら勉強始めようよ」

「ふぁゝっ。ワリイ、俺寝るから、起こしてくれ」

健介はそう言って、ソファアの上に横になる。何しに来たのか、全く分からない。

その後も、健介は眠り続け勉強をする事無く、帰っていった。本当、何しに来たんだ。結局、飯食って寝て……。本気で勉強する気があるのだろうか……。

そして、この勉強会？　らしきものは、期末テストが終るまで続いたのだった……。

第三十六通 美樹からの誘い

勉強会のかいもあってか、何とか健介は赤点を免れた。こっちは、健介に振り回され、全く勉強にならなかったが、健介が赤点じゃなかった事は、友達として嬉しかった。これで、健介から開放されると、思うと嬉しくて涙が出そうだった。

久々に休日をつくりと過ごしていた。もちろん、ベッドで横になって漫画を読んでいるだけなのだが……。

そんな時、携帯音が机の上で鳴り響いた。しかし、僕も学習能力が無いのか、今回も例の如くベッドから落ちた。理由は言うまでも無いだろう。

メールが届いていた。しかも、安奈では無く美樹からだった。

『あの……。今日は、暇ですか？ もしよければ、一緒に映画でも行きませんか？』

女の人に映画に誘われる何て、初めての事で戸惑ったが、断る理由も無かったので映画に行くと返事を返した。

しかし、映画館で映画を見るなんて、もう何年ぶりになるだろうか。あんまり、いい思い出が無かったから、忘れてしまっているだろう。

僕は待ち合わせ場所の、映画館の前に来ていた。映画館の周りは、流石に沢山の人が居る。殆どがカップルで、何だか自分が場違いの所に居る気がした。

この人込みだと……美樹を探すのは大変そうだった。美樹の方も、僕を探すのは大変だろう。そう思い、僕はとりあえず、メールを送る事にした。

『今、待ち合わせ場所にいるんだけど、この人込みじゃ探すのに苦

勞しそうだから——』

内容が長くなりそうだったので、一部省略。と、まあ自分の服装を詳しくメールで送った。そのメールを送った直後、美樹の声が僕の耳に届いた。

「倉田君。こっちです」

「おはよう、美樹」

白いワンピースの美樹は、制服姿と違い何だか新鮮な感じがした。しかしまあ、本当に眼鏡がよく似合う。

「今日は、誘ってくれてありがとう」

「いえ。丁度、チケットを2枚貰ったんで……」

「でも、何で僕なんかを？」

「エッ！？ その……」

急に口ごもった美樹。何か、聞いちゃいけない事でも、聞いてしまったのだろうか。そう思った僕は、とりあえず映画館に入ろうと言って、話を進めた。カップルだらけの映画館に入るのは、何か気が引けたが、それはしょうがなかった。

第三十七通 ファミレス

僕と美樹が見た映画は、恋愛映画らしく。何だかよく分からないが、感動的な映画だったらしい。僕にはよく分からない内容の映画だった。と、言うか途中睡魔と格闘していたため、殆ど見ていなかった。

「凄く、感動的でしたね」

「そ、そうだね……」

一応、美樹にそう返事を返した。見ていなかったと言ったら、何だか美樹に悪いと思ったからだ。

「お腹、空きませんか？」

「そうだね。もう、お昼だからね」

「それじゃあ、あそこでお昼食べませんか？」

美樹はそう言って、ファミレスを指差した。まあ、お金もボチボチ持っていたし、お腹も空いていたので、とりあえずファミレスでお昼を食べる事にした。意外とファミレスは空いていて、静かだった。

僕はメニューを見ながら、何を食べるか悩んでいた。しかし、結構値段が高い物ばかり、並んでいる。これは、安い物を頼んだ方が賢明だろう。そう思った瞬間に、ウェイトレスがやって来た。

「ご注文は？」

「僕はサンドイッチセットで……」

とりあえず、一番安いサンドイッチセットを頼んだが、何だか力

ツコ悪い。

「それじゃあ、私も同じ物を」

「サンドイッチセットをお二つですね。少々お待ちください」

そう言っってウェイトレスは奥へと行っってしまった。暫く沈黙が続いたが、美樹がその沈黙を破った。

「倉田君、恋愛映画って嫌いですか？」

「エッ！？ 急に、どうしたの？」

「いえ、あんまり映画の話をなさらないので、嫌いだったのかと……」

物凄い観察力だ。だが、別に恋愛映画が嫌いと言うわけじゃない。ただ単に、映画を見たのも久しぶりだったし、美樹とこうして食事をするなんて、思っってなかったから結構、緊張していた。

「いや、別に恋愛映画が、嫌いって訳じゃなくてさ……。あんまり、映画を見ないから、何を話したらいいかと思っって……」

「そうですか。もしかして、迷惑でした？」

「全然、迷惑じゃないよ。僕も、暇だったから」

僕はそう言っって微笑んだが、美樹は複雑そうな顔をしていた。その後、沈黙が続いた。こんな時、どうしたらいいのか、僕には分からなかった。

第三十八通 最悪で最低の男

食事を済ませた僕と美樹は、近くの公園に来ていた。とても広い公園で、中央に大きな池がある。その池がとても澄んでいて、心が落ち着く感じがする。

しかし、この公園もカップルが多い。しかも、二人でマフラーを巻いて……。何か、無性にムカつく。自分の恋が実らないから、他の人が上手くいってるのを見ると、そんな感じになるんだろう。ベンチに僕と美樹は、並んで座り池を見ていた。やはり、沈黙が続いた。何か話そうと、考えている僕に、美樹が口を開いた。

「今日は、楽しかったです」

「そっか。僕も、楽しかったよ」

「そうですか。そう言ってもらうと、嬉しいです」

そう言って美樹は今日一番の笑顔を見せた。そして、この笑顔が今日最後に見た笑顔だった。

その後、何が無い会話をしていた僕と美樹だったが、次第に日が暮れるのが分かった。

「そろそろ、帰ろうか」

「そ……そうですね」

少しオドオドした様子で、美樹はそう返事をした。どうしてオドオドしているのか、僕には分からなかった。ベンチから、立ち上がった僕に、美樹がゆっくりと口を開く。

「あの……。実は、今日伝えたい事があったんです」

「伝えたい事？」

「はい……」

小さく返事をした美樹は、ゆっくりと深呼吸した。僕には何がしたいのか、全く分からなからず、美樹の方を見ていた。そんな僕に、美樹がゆっくりと口を開いた。

「初めて会った時から、好きでした。も、もしよければ、私とお付き合ってもらえないでしょうか」

「――!?」

驚きを隠せなかった。なぜ、美樹に告白されたのかも、よく分からず頭の中が混乱していた。何も言わない僕に、美樹が声を掛けた。

「あの……」

この言葉で、僕は正気に戻った。そして、美樹に返事を返した。その瞬間に、美樹は泣き出し、走り去ってしまった。

僕は勇気を出して告白してくれた、美樹を傷つけてしまった。でも、他に好きな人が居るのに、美樹の告白を受けて別れてしまえば、さらに彼女を傷つけると思い、告白を断ったのだ。

何だか、涙が溢れてきた。もう訳が分からなかった。僕は最悪で最低の男だ……。

そして、重い足取りで家に帰った僕を、恵利が冷たい目で睨みつけていた。恵利は、美樹が僕の事を好きだと言う事も、今日告白する事も全て知っていた。

そして、僕が美樹の告白を断ったのも……。

第三十九通 大切な友達

次の日、学校にはすでに僕が美樹をフツたと、言う事が知れ渡っていた。その状況をこっさり、見ていた奴がいたらしい。それが、誰かは分からないが、そう言う話が広まるのは、早かった。

その日、僕はクラス、いや、同じ学年の男女共から、冷たい視線を集めていた。教室でもその話をコソコソと、話している連中が居て、何だか居づらかった。美樹の方は、学校を休んでいた。やっぱり、傷ついたのだろう。

そんな事を考えていると、僕の席を5人の男子が囲んでいた。知らない顔の奴も居て、何やら怖い顔をしている。嫌な予感がしていた。

そして、その予感は的中した。

僕は人気の無い校舎裏へと連れて行かれた。壁に押しのけられた。

「乱暴は止めようよ」

僕はそう言って彼らの顔を見た。やはり、怖い顔をしている。

「お前、何様のつもりだ」

「何様って……」

言い返そうとした僕の右頬を、目の前に立つ男が殴った。僕は地面に倒れて、目の前の男を見上げた。男は指の骨を鳴らして、僕を見下していた。

そして、5人の男はそのまま僕を、蹴りつけてきた。全身に痛みが走る。僕は何も出来ず、ただ痛みに耐えるしかなかった。

「お前等！ 何してやがる！」

遠くから誰か男の声が響いた。聞いた事のある男の声が……。僕を囲んでいた男子生徒は、その男の声で一目散に逃げだした。男は僕に駆け寄った。その時に、初めてその男が健介だと気がついた。

「大丈夫か！ マサ」

僕の体を起こし、健介はそう言った。僕の耳には微かにしか、その声は聞こえなかった。そして、そのまま気を失い、目を覚ましたのは保健室のベッドの上だった。

「おい、大丈夫か？」

「うん……。大丈夫」

「ったく、お前が5人組に連れてかれたって、聞いてわざわざ行ってみれば……」

呆れ顔で健介はそう言って、笑っていた。多分、健介が助けに来てくれなければ、僕は今頃どうなっていたか。今まで色々あったが、健介がいい奴だとこの日知った。

「それで、本当に美樹をフツたのか？」

突然、健介はその話をした。別に隠すつもりは無かった。だから、健介には全てを話した。映画に行き、ファミレスで食事をして、公園で告白されたと。

その話を聞いて、暫く健介は黙っていた。やはり、怒っているのだろうか。そう思うと、健介の顔を見る事が出来なかった。視線を逸らした僕に、健介が肩を叩きながら言った。

「まあ、お前の事だ。他に好きな人が居るから、断ったんだろうな。」

それか、好きでも無いのに、簡単に付き合うなんて出来ないよな」

僕は嬉しかった。健介がこんな風に僕の事を心配してくれる事が……。視界が霞み、涙が溢れそうになったが、健介が居るので涙は堪えた。

「それより、美樹は学年でもかなり人気のある娘だ。その美樹の告白を、学年で最も目立たないお前がフツた事で、男子も女子もお前に怒りを覚えてるぞ」

「えっ……。男子はともかく、何で女子が？」

僕がそう訊くと、健介はため息を吐き頭を描きながらゆっくりと口を開いた。

「実は美樹がお前の事を好きなのは、殆どの女子が知っていてな。それで、告白する様に背中を押したのも、学年の殆どの女子らしい。それが、告白したらフラれた。あいつは目立たなくせに、美樹をフルなんて何考えてんだ、だとさ」

そう言って、健介は首を横に振っていた。まあ、当然の事だろうと思った。目立たない僕が、学年でも人気の美樹の告白を断ってしまったのだから……。落ち込む僕に、健介が笑いながら言った。

「まあ、俺と和彦はお前の味方だ。何かやられそうになったら、いつでも呼べよ」

そう言って、白い歯を見せながら笑っていた。健介と友達でよかったと、心からそう思った。

第四十通 冬の屋上

あれから、学校で色々と言われる様になったが、健介と和彦は僕の事をいつも助けてくれていた。

そして、その騒動も一週間後、美樹が学校に来て、ようやくおさまった。美樹とはまだ、一言も言葉を交わしていない。当然の事だろう。きっと、僕の事を嫌っているだろうから……。

そんな僕は、騒動がおさまったがなるべく、教室に居ないようにしていた。教室に居ると、他の生徒の視線が冷たく、僕に集まる様な気がしたからだ。そのため、12月という寒い時期に、屋上で一人寂しく弁当を食べていた。

まあ、この寒さだと誰も屋上には、来ないだらから心が落ち着いた。たまに、健介や和彦が来る事がある。そして、今日は健介が来ていた。

「なあ、そろそろ、教室で弁当食ってもいいんじゃないのか？」

「うん……。でも、あんまり教室には居たくないから……」

「でもよ、こうも寒いと風邪引くぞ」

健介はそう言って腕を組んでブルブルと震えている。僕は随分この寒さに慣れたせいかな、あんまり寒いと感ぜない。慣れって、本当に凄いのと思う。

「そう言えば、そろそろ教えろよ。お前の好きな人を」

「ぼ、僕の好きな人!？」

いきなり健介の切り出した言葉に、思わず口に入っていた物を嘔出してしまった。

「うわっ、きたねえ〜な！」

「け、健介が変な事言うからだよ」

「何だよ。人のせいにするのか！」

拳を振り上げて、健介はそう言った。だが、すぐに笑い出した。

「ハハハハッ。そんな事より、早く聞かせろよ。お前の好きな人を。和彦は知ってるんだろ」

「何で、そこで和彦が出て来るんだよ」

そう言った僕の肩に健介は腕を回し、ゆっくりと首を絞めた。

「言わないと、もったときつくなるぞ」

あまりに苦しかったので、僕は思わず言ってしまった。

「わ！ わかった。お、教えるから！」

「最初っから、そう言えばいいんだよ」

そう言って、健介は力を緩めた。本当に、力だけはある。って言うか、筋肉馬鹿。いや、野球馬鹿かな。まあ、どちらにしてもあまり変わらないような気が……。

僕はそう思いながら、咳き込んでいた。

「ゴホッ！ ゴホッ！」

「オイオイ、大丈夫か？ もしかして風邪か？」

いや、違う。これは、健介に首を絞められたせいで、出た咳だ。一瞬、意識を失いそうになったが、何とか踏みとどまったのだ。

そして、僕は健介に安奈との事を話した。出会いから、今までの

事を全て。すると、健介は羨ましそうにしていたが、僕が健介の彼女の話を訊くと、すぐに嬉しそうに彼女の話を始めた。

第四十一通　クリスマスの予定

12月に入り、随分と日が経った。学校で色々あったから気付かなかったが、すでに街はクリスマス一色に染まっている。

すっかり忘れていた。と、言うか今までクリスマスとは、無縁だったため気にも止めていなかったが、今年のクリスマスは今までは、違うクリスマスにしたいと思っていた。まあ、そうは思っても、実行に移す事はできないだろう。現実はあるに甘くないのだから……。

ため息を吐きながら、ベッドに座っていると、携帯音が鳴り響いた。その音からすぐに安奈からのメールだと気付いた。携帯を取りすぐにメールを確認した。

『久しぶり。元気だったかな？　実は、修学旅行に行っていました。しかも、携帯を寮に忘れたまま。ごめんね。もしかして、私からのメール楽しみにしてたかな？』

と、まあこんな内容のメールだった。修学旅行か、僕の高校は修学旅行は無いため安奈が羨ましかった。去年まではあったのだが、先輩達が事件を起こしたため、今年から修学旅行はなくなったのだ。何て最悪なんだ……。

『いいな。修学旅行……。僕の学校は修学旅行無いからな』

僕のメールにすぐに安奈がメールを返してくれた。

『そうなんだ。マサの高校、修学旅行無いのか。残念だね』

もちろん、僕もすぐに返事を返した。安奈とメールをしてから、

メールを打つのが速くなっていた。

『そうなんだよ。去年まではあったんだけど、先輩たちが何かやらかしてね……』

そんな風に、メールのやり取りをしていた。どうやって、クリスマスの事を切り出すか考えながら。だが、結局考えもまとまらないまま、時間ばかりが過ぎていった。

『それじゃあ、私そろそろ寝るね』

クリスマスの事は諦めて、僕は返事を返した。

『うん。オヤスミ。また、明日』

結局、クリスマスの予定を聞くことも出来ずに、僕はベッドに倒れこんでいた。ため息ばかりが、漏れ何だか暗いムードに包まれている。そんな暗いムードを吹き飛ばすメールが、僕の携帯に送られてきた。

『そう言えば、クリスマスは予定あいてるかな？ もし空いてるなら、会えないかな？ プレゼント交換とかしたいから』

僕は嬉しくて、ベッドから飛び起きて、すぐにメールを送り返した。

『大丈夫。クリスマスは空いてるよ』

『よかった。じゃあ、クリスマスプレゼント、忘れないでね』

『そっちなね』

そうメールを送り、僕はその嬉しさの余韻に浸っていた。

第四十二通 プレゼント選び

僕は健介と和彦と一緒に、デパートに来ていた。僕は安奈へのクリスマスプレゼントを買うために、健介は彼女へのクリスマスプレゼントを買うために、そして、和彦は僕等にアドバイスするためだった。

僕も健介も女性に、プレゼントを買う経験がなかったため、和彦について来て貰ったのだ。一応、和彦は彼女が居るらしいが、随分と遠距離なため、中々会うことが出来ないと言っていた。

「何買ったら喜ぶかな？」

僕はそう言いながら、ガラス越しに並ぶアクセサリーを見ていた。どれもキラキラと煌き、結構値段が高かった。その僕の横に健介が並んで立って、ガラスケースの中を覗き込んでいる。

「結構、高い物ばかりだな……」

「まあね。そこは、高級アクセサリーショップだから」

後ろから和彦にそう言われ、僕は初めて高級アクセサリーショップだと気付いた。健介も、そうなのだろうが、いかにも俺は知っていたぞと、言わんばかりの顔をしていた。まあ、僕等が、そんな高級アクセサリーに手を出す事も出来ず、他のアクセサリーショップに移動した。

そこも、結構値段の高い物ばかりが並んでいて、僕等は結局アクセサリーは諦めて、屋上で一休みしていた。

「なあ、普通。この時期は、クリスマス用に値下げするもんじゃないのか？」

健介はベンチの背凭れに、凭れながら空を見上げてそう呟いた。
まあ、僕も始めはそう思っていたが、多分値下げしてあの値段なんじゃないかと思い始めていた。

「いつその事、自分で作ったらどうだ？」

何気ない感じで、和彦はそう言ったが、クリスマスまでもう一週間も無いため、手作りの物を作る時間なんてある筈が無かった。健介も、僕と同じ事を思っていたらしい。

「和彦。簡単に言うけど、クリスマスまで一週間しかないんだぜ。手作りの物を作ってる時間なんてあるわけ無いだろ？」

「そうかな？　とりあえず、学校休めばある程度余裕は出来ると思うけど」

そう言って、和彦は持っていた缶コーヒーを口に含んだ。意外な言葉に、僕は少し混乱していた。その時、僕の横に座っていた健介が立ち上がって叫んだ。

「そうか！　その手があったか！　学校を休めば、時間に余裕が出るな」

「あとは、何を作るかだけど、オルゴールなら作り方教えてくれる人知ってるぞ」

和彦はそう言って、笑っていた。結果、僕と健介はオルゴールを作る事に決めた。プレゼントは、商品の値段で決まるわけじゃない、と和彦は言っていた。僕もその意見に大賛成だった。

そして、その日から僕と健介は世界で、一つだけのオルゴールを作るために、和彦の知り合いの家でオルゴールを製作していた。

第四十二通 プレゼント選び（後書き）

今回、総アクセス数が3000人を突破しました。
愛読してくださる皆さん、ありがとうございます。

全く話が進んでいませんが、これから愛読宜しくお願いします。
あと、評価・メッセージをくれた皆さん、ありがとうございます。

第四十三通 前日

僕と健介は、ようやくオルゴールを完成させた。その結果、学校を丸々一週間近く休み、その代償として、冬休みに補習を受ける事になった。何のために、中間テストと期末テストを頑張ったのか……。

まあ、それでも、このオルゴールを貰った安奈の喜んだ顔が見れたら、いいなと思っていたが、安奈がこのオルゴールを貰って、本当に喜ぶのかと考えると、何だか不安になった。

完成したオルゴールを手に、僕と健介は帰路についていた。

「そう言えば、お前は何の曲にしたんだ？」

「僕は、クリスマスプレゼントだし、ジングルベルかな。健介は？」

僕がそう訊いて健介の方を見ると、何やら不安そうな顔をしていた。それが、なぜか僕には分からなかった。

「どうかした？」

「いや……。俺、何も思い浮かばなかったから、彼女の好きな曲をオルゴールにしたんだが、普通はクリスマスソングだよな……」

「別に、気にすること無いよ。それに、彼女の好きな曲なら大丈夫だよ」

そう言って、健介を励ましたが、結局最後まで落ち込んだままだった。何とか立ち直って欲しかったが、こう言う事になると結構引きずるらしい。

「それじゃあ。僕はこっちだから」

「じゃあな……」

フラフラしながら、健介は帰っていった。僕はその健介の後ろ姿を、暫く見ていたが、冷たい風が吹いたのですぐに家に帰った。

鍵を開けて、誰も居ない家の中に、いつもの様に「ただいま」と、言って靴を脱いだ。電気は消えているので、家の中は暗かったが、とりあえず、2階にある自分の部屋に行き、鞆を置いて制服を着替えた。

そして、すぐに1階のキッチンに移動した。その理由は、恵利に頼まれていたケーキを、作らないと行けないからだ。親がなかなか家に帰らないため、僕は幼い頃からクリスマスケーキや誕生日ケーキを、自分で作っていた。そのため、今ではケーキを作るのも料理を作るのも、結構上手くなってきていた。

「さて……。材料は、恵利が買ってきてあるから……」

材料を全て集めると、ケーキ作りを開始した。今年は、僕が出かけると言ったので、家で友達を呼んでパーティーをすると、恵利は言っていた。だから、いつもより大きなケーキを作ろうと考えていた。

ケーキ作りを始めて、暫くすると恵利が帰ってきた。

「オッ、やってるね」

「やってるよ。一応、約束だから」

「それじゃあ、頑張ってるね」

そう言って、恵利はその場を去っていった。その日、僕は遅くまでケーキを作っていた。

第四十四通 ドキドキの待ち合わせ

僕は安奈との待ち合わせ場所に来ていた。駅前の噴水池の淵に腰を下ろし、安奈が来るのを待っていた。

時計台は刻々と時を刻み、僕の体は緊張して手には汗を掻いていた。右手に持っている紙袋を、傍に置いて手の平の汗をハンカチで拭いて、また紙袋を持った。

そんな事を何度も続けていると、駅の出入り口から安奈の声が聞こえた。

「ごめん。待った？」

「ううん。全然待ってないよ」

こう言う会話をする、何だか付き合っている様な気分になる。そんな事を思うのは、僕だけかも知れない。

それにしても、今日の安奈はとても美しく見えた。暫く、見とれていると、安奈が怪訝そうな顔で、僕の顔を覗きこんできた。

「ねえ。ぼんやりして、どうしたの？」

「えっ、な、なんでもないよ」

焦って僕はそう言った。そんな僕に安奈は微笑む。僕もそれにつられて微笑んだ。

「それじゃあ、行こうか」

「エッ、行くってどこに？」

僕のその言葉に、安奈はチケットを取り出して、白い歯を見せながら微笑むと言った。

「遊園地のチケット、姉さんから貰ったの」

「へっつ。お姉さんから」

安奈にお姉さんがいると言う事が驚いた。ずっと、一人っ子だと思っていたからだ。やっぱり、安奈に似ているのだろうか。

そんな事を考えながら僕は安奈についていった。

よく考えたが、遊園地に行くのって、何年ぶりだろう。幼い時に一度親戚のおじさんと、行ったっきりでそれ以来、遊園地に行った記憶はない。

まあ、両親共に子供より仕事を優先していたので、僕も妹の恵利も休みの日は殆ど家にいた記憶しかない。

遊園地に向って歩いてる時に、その事をボソツと口走ってしまった。それが聞こえていたのか、僕の横で安奈が言った。

「そうなんだ。マサも大変なんだね」

僕は焦り無理やり笑った。あんまり、家の事を話しなくなかったし、両親の話をするのが一番嫌だった。

そんな僕の気持ちを察したのか、安奈が笑いながら言った。

「それじゃあ、今日は思う存分遊園地を楽しもう」

「うん。そうだね」

安奈と並んで歩きながら、遊園地に向った。久しぶりに行く遊園地に、ドキドキしているのか、それとも、安奈と一緒にいる事にドキドキしているのか、わからないが僕の胸は強く鼓動を打っていた。

第四十五通 久しぶりの遊園地

久しぶりにやって来た遊園地には、やけにカップルが沢山いた。まあ、それはクリスマスだからだろう。

次々と目の前を通り過ぎるカップルを、目で追いながら少し呆れていた。そんな僕の横で、安奈が嬉しそうに声を上げた。

「凄いね。結構、賑わってるよ」

「まあ、クリスマスだから……」

僕は少し元氣のない声で言うと、不満そうな顔で安奈が僕の顔を覗きこんできた。それに、驚いた僕は2・3歩後退した。

「な、何？」

「何？ じゃないでしょ！ ほら、元氣出して行くわよ」

「う、うん」

本来なら、安奈と一緒に嬉しいのだろうが、昨日はなかなか眠る事が出来ず、寝不足で体が重かった。そんな状態でも、何とか安奈の前では元氣に振舞おうと思った。

僕と安奈が始めにやってきたのは、ホラーハウス。まあ、お化け屋敷と変わらないのだろうが、立体映像のお化けが出るとか出ないとか。

まあ、別にお化けが怖いわけじゃないしと、軽い気持ちでホラーハウスに入った僕だったが、出てきた時には背筋に冷や汗を掻いていた。

「結構迫力あったね」

「そ、そうだね」

安奈は清々しい顔で笑っているが、実際は凄いリアルな立体映像の化け物が出てきて、とても恐ろしかった。暫く来ていない内に、遊園地のお化け屋敷も大分変わったようだ。

「ねえ、どうかした？ 顔色悪いよ」

不安そうに安奈は、僕の顔を覗きこんだ。そんなに、僕は顔色が悪いのだろうか？

自分の顔色を見る事が出来ないので、分からないが相当顔色が悪いらしい。

「少し休もうか？」

「大丈夫。さあ、次行こうか」

無理に微笑みゆっくり歩き出した。多分、眠気がピークに達しているのだろう。

心配そうにしていた安奈も、少し安心した様な顔をして、次の場所に移動した。

「次は、これにしよう」

「これって……」

そこにあっただのは、絶叫マシンだった。あんまり、絶叫マシンが好きじゃなかった。と、言うか高所恐怖症で、高い所は苦手だった。少し半笑いでその場に立ち尽くしていると、安奈が楽しそうに笑みを浮かべながら僕に手を振って言った。

「ねえ、早く乗ろうよ」

どうするか、迷ったが僕に選択の余地は無かった。返事をしない僕の腕を、安奈が引っ張り無理やり絶叫マシンに乘せられた。

その後、僕の意識は無くなっていた。完璧に気絶し、暫く目を覚ます事は無かった。

第四十六通 クリスマスプレゼント

気を失っていた僕が目を覚ましたのは、安奈の膝の上でだった。目を開くと、安奈が僕の顔を覗きこんでいて、僕は驚いてすぐに体を起こした。

辺りは随分と静かになっていて、日も落ちて辺りは明かりが点灯していた。その事から、随分と眠っていたのだとわかった。

何だか、申し訳なく安奈の顔を見る事が出来なかった。黙っている僕に、安奈がゆっくりと口を開いた。

「もう、大丈夫？ いきなり倒れちゃうから驚いたよ」
「ず……ごめん」

僕は深々と頭を下げた。そのまま、ずっと頭を下げていたいと思っていたが、優しく安奈が言った。

「もういいよ。私、気にしてないから」

その言葉に僕はゆっくりと、頭を上げた。そして、ゆっくりと安奈の顔を見た。優しく可愛らしく微笑んでいる。

安奈の手には、綺麗な紙袋を手持っていた。その中に僕へのクリスマスプレゼントが入っているのだと、何となく察知した。

僕は自分の持っていた紙袋を探した。キョロキョロしていると、安奈が口を開いた。

「もしかして、これ探してる？」
「あっ！」

安奈は僕に紙袋を手渡した。その紙袋は、確かに僕が持っていた

紙袋だった。僕はそれを受け取り、中を確認した。中には綺麗に包まれた四角い箱が入っていた。まだ、プレゼントは開けられていないようだ。少し安心した僕に、安奈が持っていた紙袋を差し出した。

「これ、クリスマスプレゼント。何にしようか迷ったけど、結局マフラーにしちゃった」

そう言って安奈は微笑んでいる。僕はその紙袋を受け取り、中身を見た。中には手編みのマフラーが入っていた。

あまりの嬉しさに、失神してしまいそうだったが、何とかそれを堪えた。

「ありがとう。嬉しいよ」

僕はとりあえず、中からマフラーを出し、首に巻いた。とても、暖かく気持ちいがある感じがした。

そして、今度は僕が安奈に紙袋を差し出した。

「これ、僕からのクリスマスプレゼント」

僕が差し出した紙袋を受け取った安奈は、ニコニコ笑みを浮かべながら紙袋の中から、綺麗に包まれた箱を取り出した。

器用に包みを開いていと、真っ白な箱が現われた。安奈はその箱をゆっくりと開いた。

その中には、綺麗な箱の木箱が入っていた。それが、オルゴールだ。

「すごい。手作りのオルゴールだ」

嬉しそうにオルゴールを見ている安奈を、見ていると僕は嬉しく

て仕方なかった。

「マサが作ったの？」

「うん。和彦の知り合いの所で」

「そっか。嬉しい。世界で一つだけのオルゴールだね」

可愛らしく微笑んだ安奈は、ゆっくりとオルゴールの蓋を開いた。すると、ゆっくりと静かに、ジングルベルのメロディーが流れた。

所々で少し音を外すが、何とかジングルベルだとわかる。

二人の間に暫しの沈黙が続いていた。ジングルベルのメロディーだけが流れ、静かに時が過ぎていく。

第四十七通 白い妖精

ゆっくりと静かに流れる、僕の作ったオルゴールの音。その音は小さく、僕等の目の前を通る人達の耳には届いていない。

そのオルゴールの音を聞いていると、ゆっくりと白い粉が空から降りてきた。真っ白く柔らかな粉の様に、夜空を舞いながらゆつたりと降りてきた。

まるで、オルゴールの音につられて、空から降りてきた妖精の様だった。

「……雪」

オルゴールの音を聞いていた、安奈が静かにそう言った。僕も、何か言わなきゃと思ったが、出た言葉は、

「そうだね」

だった。どうしても、いい言葉が見つからなかった。

そんな僕の方を見て、安奈が優しく微笑んだ。その微笑んだ顔が、とても可愛く僕もそれにつられて微笑んだ。

「綺麗な雪だね」

「そうだね。夜空を舞う桜の花びらの様だね」

「うーん。それは、ちょっとクサイかな？」

安奈はそう言ってクスクスと笑っている。そう言われると、急に恥ずかしくなり、僕は顔は熱くなった。

そんな僕の顔を見て、安奈は更にクスクスと笑い出した。

「顔が真っ赤だよ。恥ずかしいなら、言わなきゃよかったね」
「本当だよ。ちょっと、良い言葉だと思ったのに……」

肩を落としながら僕はそう言った。暫く、間が空いて安奈がゆっくり立ち上がりながら言った。

「でも、私は好きだよ。さっきの言葉」

「エッ!？」

「だって、なかなか言えないよ。あんなクサイ言葉」

そう言って、安奈はオルゴールの蓋を閉じて、クスクスと笑っている。きっと、僕の事をからかっているのだろう。

「何だよ。もうその話はいいよ」

「えゝつ。でも、面白いじゃない」

「僕は全然面白くないよ……」

僕がそう言って落ち込むと、安奈が優しく頭を撫でながら言った。

「よしよし。そんなに落ち込まないの」

「よしよしじゃないよ。それに、落ち込ませてるの安奈じゃないか」
「ごめんごめん。もう言わないから」

安奈は両手を合わせながら、そう言った。まあ、別に怒ってるわけじゃないし、結構安奈とこうやってるのも、僕にとってはとても楽しかった。

「それじゃあ。そろそろ、帰ろうか」

安奈はそう言って、ゆっくりと歩き出した。この時、僕の心で一

つの決心がついた。それは、告白をすると言う決心だった。

僕はベンチから立ち上がり、ゆっくり安奈の方に体を向けて、はっきりとした声で言った。

「安奈！」

僕の言葉で安奈が、ゆっくりと振り返り僕に微笑みながら返事を返した。

「何？　どうかした？」

向かい会う、僕と安奈の間には沈黙が続いた。まるで、時間が止まったかの様だった。

「安奈に伝えたい事が……」

第四十八通 情けない

冬休みに入ったが、僕は補習のため学校に来ていた。外は雪が降っているため寒く、学校に来るのも一苦労だ。

教室には僕と健介の二人の姿しかなかった。意外な話だが、健介は補習には必ずやってくる。結構真面目な一面があった。

担当の先生は例の如く、プリントだけをおいて暖房のある職員室へと戻っていった。

静まり返った教室で、課題プリントと睨み合う僕の前の席に、健介が移動してきた。そして、ニヤニヤしながら僕の顔を見ている。何か言いたそうな顔だった。

「な、何？」

あんまりニヤニヤしながら、顔を見てくるので僕の方が先に口を開いた。そんな僕に、健介は「ジャジャーン」と、言って右手を見せた。なぜ、右手を見せたかわからず、僕は首をかしげた。

「右手がどうかした？」

「右手じゃなくて……。これだよ、これ」

健介はそう言って右手にはめている指輪を、外して僕に見せびらかす。その指輪が何なのか僕に分かる訳もなく、首を傾げると健介はため息を吐いた。

「何だよ……。反応なしだよ。クリスマスプレゼントだぜ」

「彼女からの？」

「そうだよ。もう少し反応したっていいんじゃないか？」

そう言った健介に、僕はわざとらしく言った。

「うわーっ。凄いな。僕も欲しい。これで、いい？」

「何だよ。投げやりだな。って言うか機嫌悪いな。どうかしたのか？」

確かに今日はあんまり、機嫌がよくなかった。別に健介が悪いわけじゃない。あの日の事を、未だに引きずっているからだ……。

あの日の事とは、クリスマスの日の事になる。

告白をしようと決心した僕だったが、結局告白する勇気が出ず、あの時に言った言葉は、

「今日は楽しかった。また、遊園地に来ようよ」

だった。本当に情けない。意気地なしとは、きっと僕の事を言うのだろう。

その話をすると、健介は僕の肩を二度叩いて言った。

「告白できなかったのか。残念だったな」

結構意外だった。もっと何か言われるかと思っていた。意外な言葉に、戸惑っている僕に健介は更に言葉を続けた。

「まあ、そう落ち込むなって。別にフラれた訳じゃないんだしよ。まだ、時間はあるさ」

「それでも、情けないよ……」

そう言った僕の頭を、両手で健介は掻き毟った。それに驚き、僕は席を立った。

「な、何するんだよ。いきなり」

「そんなに悩むなって。誰だってすぐに告白できるわけじゃないんだ。情けないなんて言うな。俺なんて何度、告白に失敗してるか」

確かに健介は何度も告白に失敗している。その事を考えると何だか、気が楽になった。

第四十九通 鍋

補習も終わり、ようやく冬休みをゆっくり過ごし終った。今日も外は雪が降っている為、僕は部屋でゆっくりと読書（漫画）を楽しんでいた。まあ、する事がなかったから、そうしていただけたのだが――。

最近、安奈は忙しくてあんまりメールを送ってこない。僕も、あんまり迷惑を掛けないように、メールを控えていた。

そんな僕は読書をしている内に、眠ってしまい目を覚ましたのは、携帯音だった。

「んっ？ 誰だ？」

ボソッと独り言を口走り、机の上の携帯に手を上した。そして、携帯を何とか掴んだ。今回は何とベッドから落ちる事はなかった。流石に毎度毎度落ちると、少しコツを覚えるらしい。と、油断した僕は、ベッドの手摺を掴む手が滑り、ベッドから落っこちてしまった。油断大敵とはよく言ったものだ。

「ううっ……。今日はうまく行っと思ったのに……」

頭を摩りながら僕は立ち上がった。携帯にはメールが届いていた。

『起きてるか？ って言うか、一緒に鍋しないか？』

メールは健介からで、一緒に鍋をしようと言う事だが、まさか僕の家でやる訳じゃと、思っているともう一度携帯が鳴り響いた。

『今日、親居ないから俺の家で、やろうと思うんだけど……。俺、

料理できないし、一人で鍋は何だろ？　だからさ、俺とお前と和彦でどうだ？』

ホッと肩を落とした僕は、ある事に驚きメールを見た。僕が驚いたのは健介が和彦を誘うと言った事だった。しばし、呆然としていたが、何とか我に返って返事を返した。

『わかった。それじゃあ、今から健介の家に行くよ』

『なら、食材買ってきてくれ。お金は後で払うからさ』
『うん。それじゃあ』

僕はそう送り返して、出かける準備をした。

その後、買出しをして、途中で和彦と合流した。

「まさか、健介が俺を鍋に誘うと思わなかったよ」

「そうだね。僕も驚いたよ」

僕はそう言って笑った。楽しく会話をしながら、僕と和彦は健介の家に向った。健介は僕等を笑顔で迎え入れた。

「おう。遅かったな」

「そうかな？」

僕はそう言って和彦の顔を見た。和彦は首を傾げて、息を吐いた。そして、僕は買ってきた食材を適当に切り、鍋の準備をしていた。その時、携帯音が響いた。もちろん、僕の携帯だった。音に気付いた健介と和彦が、僕の方を見ていた。

「電話か？」

健介がコンロを準備する手を休めてそう言う。僕は携帯の画面を見て、メールだという事を確認して答えた。

「ううん。メールだよ」

「そっか……。あっ！ まさか、安奈ちゃんか！？」

確かに、健介の言うとおりメールは安奈からのものだった。何と言う恐ろしい勘なんだ。何とか誤魔化そうとしたが、結局誤魔化す事は出来ず、メールは健介と和彦に読まれた。

その後、茶化されながらも、安奈とメールのやり取りしていた。鍋の方は和彦が代わりに、食材を切っておいしくいただいたのだった。

第四十九通 鍋（後書き）

今回、総アクセス数が4000人を突破しました。

愛読してくださる皆さん、本当にありがとうございます。

色々メッセージや評価を頂き、とても嬉しいです。

この話で、49通目になるのですが、未だに告白できないと言う状態が続いておりますが、皆さん気長に2人の恋を最後まで見守ってください。

これからも、どうぞ宜しくお願い致します。

第五十通 大晦日の大掃除

今年も大晦日がやって来た。毎年恒例の大掃除を僕は始めようとしていた。

両親共に家には居らず、毎年僕と恵利で大掃除をするが、去年は健介が手伝いに来てくれた。その健介は今年も手伝いに来てくれた。そして、もう一人スペシャルゲストが来ていた。

「恵利ちゃん。これ、こっちに置いとくね」

リビングに明るい安奈の声が響く。そう、スペシャルゲストとは、安奈の事だ。今は実家に帰ってきていて、大掃除の話をした時に手伝うといって、家に押し掛けて来たのだ。

僕は安奈に住所を教えた記憶はない。多分、教えたのは和彦辺りだろ。

でも、安奈が来てくれたおかげで、健介もなぜかやる気をだし、大掃除も早く終わりそうだった。

僕と健介は窓拭きをしていた。家の中の掃除は殆ど終わっているのに、寒い中僕と健介は窓拭きをする羽目に――。しかし、窓なんて拭いてどうなると言うのだろうか。

疑問を抱きつつも真面目に、窓拭きを続ける。

「いやゝ。今日は着て良かった」

何やら嬉しそうに笑顔を見せながら、健介は窓拭きをしている。何が嬉しいのかさっぱり分からないが、このまま会話が途切れるのもなんだし、一応僕は聞いてみる事に――。

「何だか嬉しそうだね」

「へへっ。当たり前だろ。安奈ちゃんに会う事は出来るし、美味しいそばまで食わしてもらうんだからな」

健介はそう言って、窓を拭く手を速めた。去年作ってあげたそばが、相当美味しかったのだろう。

「それより、安奈ちゃん可愛いな。お前とは月とスッポンって感じだな」

健介はそう言うとは大声で笑った。その笑い声は多分、家の中にも聞こえたのだろう。安奈と恵利が、不思議そうな顔をしてこっちを見ていた。

僕はそれに対し、薄らと微笑み返した。すると、安奈は僕に可愛らしく微笑んだ。

いつきにやる気が湧いてきて、笑っている健介に言った。

「ほら、健介。笑ってないで早く窓拭き終わらせるよ」

「おっ。そうだったな」

僕の言葉に健介はそう言って、窓を拭く手を更に速めた。僕もその健介に張り合うように、窓を拭く手を速めるが、体力のある健介に勝てる訳も無く力尽きた。

「大丈夫？ あんまり無理しちゃ駄目だよ」

安奈は優しくそう言いながら、僕の背中にシップを貼った。ひんやりと冷たいシップが、背中に貼り付き随分楽になった。窓拭きをしている最中に、腰を痛めてしまったのだ。

「ウゝッ……」

「お兄ちゃん張り切りすぎ」

唸り声を上げる僕に、恵利が呆れ顔でそう言った。まあ、窓拭きやってるだけで腰を痛めるなんて、情けない奴が兄だと思うと普通に呆れるしかないだろう。

「お兄ちゃんがその様子だと、今日の年越しそばは無しかな」
「なーにー！」

恵利の言葉に健介が過敏反応する。そして、肩を落とし黙り込んだ。相当ショックだったのか、暫く何も言わずに固まっていた。

第五十一通 年越しそば

日も暮れて外はすでに闇に包まれている。今年も後わずかな時間しかない。

未だショックで固まっている健介。そんなに、楽しみにしていたなんて――。本当に健介には悪い事をしたと思っている。

恵利は安奈と買出しに行き今は家にいない。なんやかんやで、今日は安奈と健介が家に泊まる事になった。健介が泊まる理由は分からないが、安奈とは明日初詣に行くと言う事で、恵利が無理やり泊めるといいだしたのだ。

「健介。そんなに落ち込まなくても……」

僕が半笑いしながら、そう言うとき健介がゆっくり振り返り、僕の方に詰め寄った。健介の息が顔に掛かる。それ位、健介の顔が近くにあると言う事になる。焦る僕に健介がゆっくりと口を開く。

「俺が……。俺がどんだけそばを楽しみにしてたか……。一年に一度の楽しみだぞ」

喋る度に息が顔に降り掛かる。何とか健介を突き放そうとするが、力では勝てず結局口走ってしまった。

「分かった。作るよ！ 作るから離れてくれ！」

その言葉を聞き、健介がゆっくりと僕から離れる。そして、嬉しそうに笑みを浮かべながら立ち上がった。引きつった笑顔を、僕は健介に向けるが、健介は全く気にしない。

まあ、腰の方も随分楽になったので、そばを作る位なら大丈夫だ

ろうと、僕はキッチンに向った。

「ソバ！ ソバ！ ソバ！」

健介はリズムカルにそう言いながら、妙な動きをしている。その妙な動きに僕は笑うしか出来なかった。

腰が少し痛むが、僕は麺打ちを始める。

麺打ちを始めて数分後、買出しに行っていた安奈と恵利が帰ってきた。

「お兄ちゃん！ 腰痛めてるんだから、寝てなきゃ駄目よ！」

「だ、大丈夫だよ。随分腰の調子もよくなってるし」

額から汗を流しながら、笑顔でそう言う。恵利はため息を吐き、右手で頭を抱えている。結構、お兄ちゃん想いな所があるのだ。安奈も心配そうに僕の顔を見つめていた。

「無理しないでね」

「う…うん。大丈夫だよ」

僕は笑顔でそう言ったが、腰はズキズキと痛む。だが、この程度の痛みに負ける訳には行かないと、歯を食い縛り麺打ちを続ける。数十分後、ようやく麺が完成。そして、すぐさまスープを作り始めた。

その間、安奈達は紅白歌合戦をみている。テレビから聞こえる歌声が、キッチンまで聞こえてくる。別に歌に興味がある訳じゃないが、何となく気になった。

スープを作り終わると、紅白も終了し今年も終わりを告げた。外では除夜の鐘が、静かに鳴り響いている。その音を耳を澄ませて聞いている3人に、僕はソバを器によそって持っていく。

「そば、出来たよ」

「おっ！ 待ってました！」

健介はそう言って僕からソバを受け取り、箸を手に持ち叫んだ。

「いただきます！」

ズルズルと音をたててソバをすする健介。安奈と恵利はその健介を見て笑っている。僕もそれにつられて笑った。

第五十二通 初詣

年も明けて朝早くから、僕と安奈は初詣に来ている。人が大勢来ていて、ゴチャゴチャとしていた。健介も彼女と一緒に来ると言っていたが、この様子だと健介と会うのは不可能だろう。

「やっぱり、人が多いね」

安奈はなかなか進まない人ごみの先を見ようと、背伸びをしながらそう言う。

「そうだね。もっと早く家出ればよかったかな？」

「うーん。どうだろう。早く出ても変らないんじゃないかな？」

背伸びをやめて少しため息交じりに安奈はそう言う。その様子から、まだ並んでいないといけないと悟った。

そして、並ぶ事数時間、ようやく僕等の番が回ってきた。僕は財布から5円玉を取り出し、投げ入れる。その後に、安奈が5円玉を投げ入れた。

（今年は、安奈に告白できますように）

と、僕は願った。まあ、祈った所で告白できるとは思っていない。結局、告白するには僕が勇気を出さない事には……。

「さあ、今度はおみくじ引こう！」

安奈はお賽銭を入れ終えて、すぐにそう言って僕の腕を引き走り出した。人ごみを分けながら、おみくじ売り場にやって来た。

僕の息は完全にあがっていた。

「ハア…ハア……」

「大丈夫？」

両膝に手をつき、下を向いたまま息をする僕に、安奈が心配そうに訊く。それに対し、笑いながら僕は返答する。

「大丈夫……」

「そう？　大丈夫そうには見えないけど？」

実際大丈夫じゃない。昨日痛めた腰の痛みが、ぶり返して来ていたのだ。だが、安奈に心配かけまいと、僕は無理に顔を上げて微笑んだ。

「マサが、大丈夫って言うならいいんだけど……。無理はしないでよ」

「うん。わかってるよ」

僕はそう言いながらおみくじを引いた。そして、安奈より先におみくじを見た。

結果は『吉』、まあ良くも悪くも無い。全くもって普通だ。

「どうだった？　私は中吉だったよ。大吉じゃないのは、ちょっと残念だけど、凶じゃないだけまだよね」

「そうだね。僕は吉だったよ」

笑顔の安奈に僕はそう言って、おみくじを見せた。安奈はマジマジとおみくじを見て言った。

「失物、家の内にありだつて。失くした物があるなら、家の中探し回るといいね」

安奈はそう言つて僕の顔を見る。僕は安奈と目が合い、ドキツとして顔を真っ赤にする。安奈はその事には気付いてない様で、おみくじを見て更に言葉を続ける。

「あゝっ。恋愛は時を待つべしだつて。どういう事かな？」

「さあ？ とり合えず、焦るなつて事じゃないかな？」
「そうなのかな？」

少し首を傾げると安奈はおみくじを綺麗にたたみ僕に返した。僕はおみくじを受け取り、財布に入れた。その後、健介達と合流して、色々と歩き回った。

第五十三通 好きという気持ち

楽しかった冬休みも終わり、三学期に突入した。

冬休みは殆ど安奈と一緒に居た印象があるが、実際は4日間だけしかあってない。まあ、冬休みが短いからそう感じるんだろう。

相変わらず、自分の席に座りボーッとしている僕に、いつもの様に健介が話しかけてきた。

「どうだ調子は？」

「まあまあだよ」

明るい元気のある健介に対し、いつもと変わらぬトーンの声で僕はそう答えた。僕の前の席に腰を下ろしながらため息を吐く健介、少々呆れているのだろう。

「なんだ？ まあまあってよ」

「うーん。良くも悪くも無いって感じかな」

僕はそう言って薄らと笑みを浮べる。すると、健介はまたため息を吐き肩を深く落とし、首を横に振りながら言う。

「最近、気が緩んでるぞ。もう少しシャキシャキ出来ないのか？」

それでも、僕はシャキシャキしている方だ。まあ、他の人からはだらけてる様にしか見えないのだろう。

「それで、あれからどうよ」

「どうって、何が？」

訳が分からないという顔をして健介を見ると、またまた深いため息を吐きながら健介は呆れている。

「お前な……。本当に安奈ちゃんの事好きなのか？」

健介は顔を近づけ、周りに聞こえないくらい小さな声でそう言う。健介の息が顔にかかり、僕は体を仰け反らして返答する。

「当たり前的事聞かないでよ」

僕がそう言うと、変な目で健介は僕を見る。まるで、「本当に好きなのか？」と、言いたげな目だ。

確かに本当に好きなのかと言うのは、自分でもよく分からない。それは、僕が今まで恋の経験がないため、どういう気持ちかが『好き』と、言う事なのか分からないのだ。だが、僕は『彼女とずっと一緒にいたい』と、言う気持ちで一杯だった。

「まあ、お前の恋だから、俺が口出しする事じゃないんだけど、高校卒業するまでには告白しろよ。卒業しちまったら、忙しくてメールの事も忘れちまうかもしれないからな」

健介は立ち上がり僕の右肩を叩いて、その場を去っていった。僕は心の中で「ありがとう」と、呟き窓の外に目をやった。蒼く輝く空をスクリーンにして、安奈の顔を思い浮かべていた。

こうして、短い三学期が始まったのだ。

第五十四通 健介の彼女

安奈との恋は発展しないまま、1月はあつと言う間に過ぎ、もう2月に突入している。

健介も最近は野球部の練習が忙しく、授業中もよく寝ているため僕の所に来る事も少なくなった。言ってなかったが、一応健介は野球部の主将だ。そのせいで、色々と疲れているらしい。

それと、近々どこかと練習試合をするらしいが、それで気合が入っているとか居ないとか。まあ、僕にはあんまり関係ない話だ。

「ふぁーっ」

学校が終わり、僕は欠伸をしながら帰りの準備をしている。教室には5、6人しか残っていないので、とても静かだ。

「さあ、帰るか……」

身支度が済み、僕は独り言を呟いてゆっくりと席を立つ。そして、窓の外に目をやると、練習をする野球部の姿が目に入った。『カキーン』と、バットでボールを打つ音が窓を閉めていても聞こえてくる。

「健介、頑張ってるな。今年は甲子園いけるといいな」

一人笑みをこぼしながら、野球部の練習を見ていた。健介の夢は甲子園に行く事だと、中学の頃聞かされていて知っていたし、健介が野球の巧い事も知っている。だが、中学では環境が悪く（と言うより、顧問の先生が悪かった）いつも一回戦負けで、結局野球の強い高校には、いけずにこの高校に入学したのだ。

それでも、健介はクサル事無く、この高校で甲子園を目指しているのだ。

「僕も健介に負けない様に、頑張らないと」

一人でそう言って気合を入れる。何を頑張るかと言うと、安奈との距離をもっと近づけるという事だ。まあ、今年こそは告白できる様にしたいと、心で願う。

そんな僕が、教室から出ると、ジャージ姿の女子生徒が声を掛けてきた。その顔立ちは可愛らしく、ジャージの色からして下級生だという事が分かる。

「すみません。倉田先輩。ちょっとお時間よろしいですか？」

「うん。大丈夫だけど……」

僕は彼女と面識がある。それは、初詣に行った時に一度会っているからだ。そう、彼女こそあの健介の彼女なのだ。

彼女の名前は鈴木 すずかわ 由梨絵 ゆりえ

言うまでも無く、野球部マネージャーで、健介の彼女。少し天然な所があるが、健介はそこがまた可愛いと言う。小柄な体格でまるで小動物のようだ。

その健介の彼女の由梨絵が、僕に何の様なのか分からなかった。

第五十五通 練習試合と美味しい？ 弁当

日曜日、僕は普段着で学校に来ている。その隣に和彦も一緒だ。実は今日、野球部の練習試合があるので、その応援に来たのだ。野球の事はそんなに詳しくは無いが、とり合えず基本的なルールは知っている。

そして、試合は今まさに始まろうとしていた。

「丁度始まるみたいだね」

「勝てるといいね」

僕と和彦は芝生に腰を下ろし、試合を見る事にした。

試合は白熱の投手戦が続く、最終的に疲れ始めた投手が減多打ちにあい、結果は13対4の惨敗と言う結果に終わった。

その4点は全て健介のホームランで取った得点だった。

「残念だったね」

試合が終わってすぐ、僕は健介にそう言った。きっと、健介は落ち込んでいると思ったからだ。しかし、健介は明るく笑いながら言う。

「全く歯が立たなかったな」

「そうか？ 健介は4打数4安打で、しかも4本塁打じゃないか」

関心した様子の声で和彦はそう言う。僕も健介は凄いと思った。

「まあ、練習試合でよかったぜ。本当に」

健介がそう言った時、遠くの方で由梨絵の声が聞こえた。

「健介せんぱい。お昼にしませんか？」

その明るい由梨絵の声に、健介が更に明るい元気のいい声で答える。

「おーっ。食う食う」

「それじゃあ。今、そっち行きますね」

そう言っって綺麗な風呂敷に包まれた、弁当箱をもって駆け寄ってくる。僕と和彦は顔を見合わせて、クスクスと笑った。

由梨絵は健介の隣に座り、風呂敷を開いた。綺麗で大きな弁当箱が現われ、それを開けると、色取り取りにオカズが並んでいた。

「おーっ！ 美味そう！ これ、由梨絵が作ったのか？」

「うん。倉田先輩に教えてもらって」

由梨絵はそう言っって僕の方を見た。そう、この前呼び止められたのは、美味しい料理の作り方を教えて欲しいと言われたのだ。とり合えず、おおまかに作り方を教えたが、見た目は美味しそうだ。

「それじゃあ、いただきますーす」

健介は手を合わせてそう言っくと、厚焼き玉子を一切れ口に運んだ。一瞬表情が曇ったが、すぐに笑みを浮かべながら言う。

「うーん。お：美味しいよ」

「よかった。あっ、よかったら倉田先輩も白羽先輩も食べてください」

僕も和彦も健介のリアクションで、薄々気付いていたが断る事が出来ず、弁当を食べる事に――。

僕はロールキャベツを、和彦はオニギリを、それぞれ口に運んだ。その瞬間、僕の口の中には濃いしょう油の味が広がった。多分、入れるものを間違えたのだろう。和彦も何やら複雑そうな表情をしている。

「どうですか？」

僕と和彦にキラキラとコメントを求めるかのように、視線を送る由梨絵になんて答えていいかわからず、チラッと健介の方を見ると、健介は頼むと言う表情で僕と和彦を見つめていた。だから、僕は薄ら笑みを浮べて返答した。

「お：美味しいよ。少し味が濃いけど……」

「駄目だ。正直に言わなきゃ！」

和彦はそう言って立ち上がると、僕と健介を交互に見た。由梨絵は立ち上がった和彦に視線を送る。僕と健介は焦り、首を横に振るが和彦はそれに対し首を横に振り返す。

「ちゃんと言わなきゃ本人の為にならないよ」

そう言うと、和彦は息を呑み、由梨絵の方をジッと見る。僕も健介も由梨絵に視線を送り息を呑む。由梨絵はその透通る瞳を輝かせながら、和彦の顔を見つめる。暫し、沈黙が続いた後ついに和彦が口を開いた。

「と：とっても、美味しかったよ」

「そうですか。そう言ってもらえると嬉しいです」

結局、和彦も由梨絵のあの眼差しに敗れてしまった。本当の事は言えぬまま、僕等3人はその弁当を完食したのだ。

第五十六通 淡い期待

明日は、バレンタインデーと言う事で、教室では男女共に何やらざわめいている。健介もその一人だ。

「明日は、バレンタインだぜ」

少し興奮気味で嬉しそうに健介はそう言う。やっぱり、チョコが一杯もらえる方が嬉しいんだろうが、僕には別に興味の無い事だ。どうせ、貰える見込みもないし、全く期待はしていない。

「なあ、マサ。勝負しないか？」

「勝負？」

「ああ、チョコ幾つ貰えるか」

全くもって興味は無い。チョコが幾つ貰え様が貰え無かろうが、結局好きな人から貰えなきゃ意味がないのだから。まあ、健介は確実に由梨絵からチョコを貰えるだろう。僕は――多分、無理かな。

「なあ、どうする？ 勝負するか？」

「僕とするより、和彦と勝負した方がいいんじゃない？」

僕が笑いながらそう言うと、健介は両手で机を激しく叩き立ち上がり、僕を指差しながら大声で言う。

「馬鹿か！ 和彦と勝負したら俺が惨敗するのが目に見えてるだろ！」

「いや。だからって、僕と勝負したら健介が勝つのが、目に見えてるよ」

僕は呆れながらそう言う。しかし、それに対して健介は強気に答える。

「何を言うか。だからこそ、勝負するんじゃないか。ワハハハッ！」

大声で笑う健介に、流石に言葉を失い笑うしか出来なかった。

学校が終わり家に帰ると、安奈からのメールが届いているのに気付いた。僕は制服を着替えながらそのメールを見た。

『今日はサッカー部の練習がお休みです♪ 久しぶりに部活が休みで、何だかゆっくり出来そう。そう言えば、明日はバレンタインデーだから、チョコを手作りしようと思うんだけど、どうやったら美味しいのできるかな?』

このメールを見て、少し肩を落としため息を吐いた。僕にチョコをどうしたら美味しくなるかと、訊くと言う事は僕に手作りチョコを渡す気はないと、言う事になるのだろう。

僕は落ち込みながらメールを返信する。

『チョコはあんまり作った事無いから、詳しく分からないな』

『そっか。それじゃあ、今から色々研究するんで、また明日ね』

それっきり今日はメールは来なかった。そして、僕は安奈の『また明日ね』と、言う言葉に何の意味があるかもわからぬまま、ゆっくりと時を過ごしていったのだった。

第五十六通 淡い期待（後書き）

今回、総アクセス数が5000人を突破しました。

愛読してくださる方々には、とても感謝しております。

僕は恋愛経験がそんなに無いため、この小説を書くのに悪戦苦闘しており、今物凄く行き詰っております。こう言うのをスランプと言うでしょう。

そのため、更新が大分遅れてしまうかもしれません。

愛読する方々には申し訳ないと思いますが、何とか早い内にスランプを脱出したいと思います。

これからも、気長に宜しくお願いいたします。

第五十七通 チョコが貰えない訳？

バレンタイン当日。

チョコを貰える訳も無く、午前中の授業が過ぎた。和彦は朝から女の子に囲まれ、沢山のチョコを手渡されていた。流石は、人気ナンバー1の和彦だ。だが、本人はあんまり嬉しくは無いらしい。

「ふっ。ようやく、一息つける」

人気の無い屋上に僕と和彦はいる。流石に、ここには女子の目も届かず、とても静かだ。校庭からは和彦を探す女子達の声が聞こえる。

「まだ探してるよ……」

ため息を吐きながら和彦はそう言う。流石の和彦も、この日だけは苦手らしい。と、その時、屋上の扉が開き一人の男が入ってくる。とても機嫌が悪そうな顔で、僕と和彦を見る。そして、大声で言う。

「ああーっ！ 和彦が……」

「やめろ！ 馬鹿！」

和彦は男の口を押さえる。そう、男とは健介の事だ。ついでに機嫌が悪いのは、未だにチョコを貰えていないからだ。

暫く暴れていた健介も、ようやく落ち着きを取り戻した。

「あーっ。なぜ、チョコが貰えん」

「日頃の行いが悪いからじゃ……」

そこまで言った時に、健介の鋭い視線に気付き言葉を呑み、笑いながらその場を誤魔化す。自分でもびっくりだが、今では健介と普通に通に話が出来るようになっていいる。

「それじゃあ。お前も日頃の行いが悪いのか？」

「いや。ユキの場合は存在感が無さ過ぎるんじゃないか？」

「そうか？ 根暗だからじゃないか？」

「うーん。それもありそうだな」

2人は言いたい放題に言いまくる。激流の様に流れ出る二人の言葉が、僕の心を激しく貫く。まあ、悪気は無いのだろうが、メチャメチャ凹む。

「あ……あのさ……」

ゆっくり口を開いた僕に、健介と和彦が同時に答える。

「どうかしたか？」

少々間を空けて僕は口を開く。

「2人とも、僕に恨みでもある？」

「恨みなんて無いさ。なあ」

健介はそう言って和彦の顔を見る。和彦は縦に首を振りながら言う。

「そうだよ。何でチョコが貰えないか、話してただけだよ」

「それならいいけど……。何か、僕に対する不満を言い合ってるだけにしか聞こえなかったから」

僕がそう言うと、2人は笑いながら顔を見合わせる。なんだか、無理やり笑っている様に見えるが、まあそこは深く追求しない様でしょう。

その後も何気ない話をしながら、昼休みは終っていった。

第五十七通 チョコが貰えない訳？（後書き）

更新が大分遅れてしまいました。

ご愛読してくださる皆さん。どうもすみませんでした。

スランプの方は、未だに乗り越えられず、また更新が遅れるかも知れませんが、何とかスランプを乗り越えられるようにがんばります。

第五十八通 変な女子高生

何事も無く、学校が終った。健介は最後までチョコが貰えず、かなり落ち込んでいたが、きつと部活が終わった後に由梨絵から、貰えるのだろうか、きつと塩と砂糖の量を間違えてると思う。

和彦は最後まで女子に追い回されていたが、結局どうなったのかは分からない。

一人寂しく帰路に着く。冷たい風が僕の頬を通り過ぎ、口から吐き出される息は白く染まっている。足元に気をつけながら、そそくさと歩いていると、目の前を歩いていた女子生徒が滑って転んだ。

僕は俯いて歩いていたため、その事に全く気付かず、そのまま通り過ぎたが、すぐに後ろから呼び止められた。

「コラ！ 女の子が転んでるのに、普通にスルーするな！」

始めは僕じゃないと思い、振り向かずにとボトボと歩いていたが、更に次なる言葉が飛んで来る。

「って、無視するな！」

未だに自分の事だと思わず、俯きながら歩いていると、背後から何やら足音が聞こえる。僕はぶつかると思わないと思い、端によって道を譲った。

「エッ！ 何で避けるのよ！」

女子生徒の声が真横で響き、何かが僕の顔の横を通過し、女子生徒がまた滑って転んだ。流石の僕も、これには気付かざるえなかった。

「イテテテッ……」

ミニスカートを右手で押えながら、左手でお尻を摩っている女子生徒。どうしたらいいか分からず、僕はとり合えず右手を差し出して言う。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫なわけ無いでしょ！」

少し怒りの籠った声で、女子生徒は僕の手を取り立ち上がる。制服からすると、この辺の高校の制服ではない。あんまり、関わり合いたくなかったので、すぐにその場を去ろうとしたがそれは、不可能だった。

「ちょっと、何処行くつもり？」

「どこって、帰るんですけど……」

「こんな可愛い女子高生を、一人置き去りにしてか？」

自分で可愛いというか。全く変なのに絡まれてしまったと、後悔する僕を彼女は睨みつけてくる。

「何？ まさか、変なのに絡まれたと思ってるんか？」

まさに、その通りだ。だが、流石に初めて会った人に、そんな事言えずにとり合えず微笑みながら口を開いた。

「まさか……」

「本当か？ なら、案内してくれんか？」

「どこにですか？」

「ふふ」

彼女は手に持っている紙切れを僕に渡した。それには、駅から僕の通う高校までの地図らしき物が描いてある。所々省略されているが、何となく分かる。なぜ、僕の通う高校に行きたいかは、分からないがとり合えず案内する事にした。

第五十九通 和彦の彼女

結局、また学校に戻ってきてしまった。理由は、この女子高生のせいだ。

名前も知らないこの女子高生に、帰り道で絡まれてしまい、仕方なく学校に――。

「それじゃあ。僕はこれで……」

帰ろうとした僕は腕を掴まれ、結局帰して貰えなかった。彼女は人を探しているらしく、その人を探す手伝いをしろとの事だ。

渋々探すのを手伝うが、その人の名前も特徴も教えてくれないので、僕には探しようがなかった。

「いないな……。帰っちゃったのかな？」

僕に向って、彼女が疑問を投げかける。知るか、と言ってやりたいがそこは、堪えて笑顔で返答する。

「どうだろう。学校終って随分経つからね」

「そうだよな。もう少し早めに来てたら……」

そう言って、彼女は座り込んでいる僕の顔を睨み付ける。いかにもお前が、悪いんだぞと、言っているような目をしている。僕は何も言わずにただただ、笑い続けた。

そんな時、人だかりの中から和彦の声が聞こえた。

「オッ！ ユキ！」

その声に反応し、僕は立ち上がり人だかりの中を見る。人だかりの中に微かに和彦の姿が見え、僕は返事を返そうとした時、その隣で女子高生が声を上げた。

「キーンッ！ かゝずゝひゝこゝ！」

「は、春奈！」

和彦はその声の方を向き、そう叫んだ。訳が分からず、僕はただその場に立ち尽くすしている。そう、彼女が探していたのは和彦だったのだ。

和彦は僕とその春奈と言う女子高生の側に駆け寄り、周りを警戒しながら小声で言う。

「ここじゃあ、目立つから場所を移そう」

「えーっ。どうしてよ」

「どうしてもだよ！」

「わかった」

少し甘える様な声で、春奈はそう言って嬉しそうに歩き出した。どういふ関係なのか、全く分からず、とり合えず僕は和彦について行った。

静かな公園にやって来た。僕はとり合えず、和彦と春奈のやり取りとじっくり観察する事に。

「お前、何しに来たんだ！」

「うちの高校、今修学旅行中なんよ」

「そんな訳あるか！ 大体、何で修学旅行でこんな所に来るんだよ！」

「今は自由行動の時間なん」

「だからってな……」

ため息を吐き呆れ返った様子の和彦。そして、会話のやり取りから、大体の事は理解した。きつと、あの春奈と言う娘が和彦の彼女なのだろう。修学旅行の自由行動で、彼氏に会いに来るなんて、何て凄い根性をしているんだ。

そんな風に思っていると、和彦が僕の方を見て口を開く。

「何か、迷惑かけたみたいだな。こいつが俺の彼女」

「迷惑なんてかけてない！ どっちかって言うと、掛けられた方だ！」

「口は悪いけど、良い娘なんだよ」

和彦はそう言って笑う。本当に彼女の事が好きなんだと、心からそう思った。暫く話をしたが、春奈がすぐに僕を追い払った。僕も2人の間を邪魔するつもりは無く、すぐにその場を立ち去った。

第六十通 チョコレート

色々あったが、ようやく僕も家に帰れそうだ。公園を出てすぐに、僕の携帯がポケットで震える。僕はそれに気付き、ポケットから携帯を出して、開いて画面を見る。

そこには、メールのマークがついていた。多分、安奈からだと思いいメールを開いたが、その予想は軽々と崩された。

『やったぞ！ ついにチョコを貰ったぞ！ 羨ましいだろ、欲しいだろ。この勝負俺の勝ちだな』

健介からのメールだった。って言うか、勝負をするなんて一言も言っていない。しかし、チョコがもらえただけで、あんなに喜ばなくても、思っているともう一度携帯が震えた。

今度こそ、安奈だと思い、すぐにメールを開く。だが、またしても期待は裏切られる。

『ウオッ……。だ、駄目だ。塩辛いチョコなんて、チョコじゃねえ……』

またしても、健介からのメールだ。やっぱり、由梨絵は塩と砂糖を間違えたようだ。とり合えず、健介に返事を送る事に。

『大変だね（笑） まあ、塩辛いチョコって言うのも、新鮮でいいんじゃない？』

『笑い事じゃねえ』

そこで、健介とのメールは遮断された。と、言うより遮断した。話を聞けば長くなる気がしたから、聞かない事にしたのだ。

そんなこんなで、足元に気をつけながら帰路を歩く。暫くして、背後から聞き覚えのある声で呼び止められた。

「マゝサゝ」

「ンッ？」

俯いていた僕は足を止め、振り返った。そこには、制服姿の安奈が立っていた。幻かと思い、目を擦りもう一度その姿を見る。しかし、幻ではなかった。

「何してるの？」

首を傾げながら安奈はそう言う。なぜ、安奈がここにいるのか分からず、ボーッとする僕の頭に安奈の鞆が飛ぶ。顔に鞆が当たり僕は我に返った。

「あ、安奈！ 今日学校じゃ？」

「今日は短縮だったの」

「そうなんだ……」

すんなりと安奈の言う事に納得する。まあ、安奈が嘘をつくなんて思っていないから、すんなりと納得できたんだろう。暫し、安奈との会話を楽しみながら時を過ごす。

風が冷たく吹くが、安奈と話しているだけで、その事を忘れてしまふ。気付いた時には、安奈を駅の前まで送っていた。

「随分、寒くなってきたし、風邪引かない様に気をつけてね」

「うん。安奈も風邪引かない様に」

笑いながら安奈にそう言うと、安奈も笑う。時が止まって欲しい

と願うが、そんな事は無理に決まっている。時は着々と過ぎ、安奈との時間も後わずか。その時、僕の脳裏にふとした疑問が生まれた。

「そう言えば、安奈何しに来たの？ 結局、用件聞いてなかったけど」

「用件？ あっ、そうだった。これ渡しに来たの」

鞆に手を入れるとピンクの包み紙に包まれた、正方形の箱を取り出す。ピンクの包みには、赤いリボンが巻いてあった。それが、チョコである事は何となくわかった。

「バレンタインだし、チョコ渡そうと思ってね。これは、マサの分ね」

「これは？」

「うん。健介君と和彦君の分もあるんだ。義理チョコだけどね」

安奈はそう言うのと、ピンクの包みの赤いリボンが巻いてある箱を僕に渡して、鞆から小さな赤と白のチェック柄の包み紙に包まれた箱を、二箱取り出して渡す。

「それじゃあ、私は帰るね。バイバイ」

「うん。またメールで」

可愛く微笑みながら安奈は僕に手を振り、僕もそれに微笑みながら手を振り返す。安奈の姿が見えなくなり、僕は家に帰ろうと足を進めた。安奈からチョコが貰え、その事を伝えようと健介にメールを送ったのだった。

第六十一通 学年末テストにむけて

バレンタインが過ぎ、二月も終わりが近付いていた。もう時期、学年末試験があるが、僕は特に気にもしていない。健介は春休みの補習だけは、免れようと必死になっている。

まあ、そのお陰で僕はのんびりと過ごせるのだ。

『私の学校、もうすぐ学年末試験があるんだ。サイアク』（泣）マサの所も、もうじき学年末でしょ？ 勉強ちゃんとしてる？』

のんびりと机にうつ伏せになっていた僕に、安奈からのメールが届いていた。僕はこのメールを見て、苦笑いしてしまった。何だか、どこかで安奈に見られている様な気分だ。

『もちろん、やってるよ。流石にそろそろやばいからね（笑）真面目に勉強しなきゃ』

とり合えず、勉強をしていると返答する。まあ、これも安奈に心配させ無い様にするためだ。別に安奈は心配している訳じゃないと思うけど、僕は安奈がそう思っていると完全に思い込んでいる。

授業が始まり安奈とのメールは中断された。暫しつまらない数学の授業を受け、休み時間に入ると安奈からのメールが届く。

『本当に勉強やってるの？ 昨日、恵利ちゃんに聞いたら、漫画読んでるって言ってたけど』

全くその通り。僕は昨日、ベッドに横になり漫画を読んでいた。まさか、安奈が恵利とメールをしていたなんて……。

授業が始まる前に、安奈にメールを送ろうとメールを打った。

『漫画は息抜きだよ。勉強ばかりだと疲れるじゃない』

次にメールが来たのは、昼休みに入ってからだった。僕はいつもの様に冷たい風の吹く屋上で、弁当を食べながらメールを読んでいた。

『まあ、確かに勉強ばかりだと、疲れるよね。私も最近疲れを感じるわ……。きっと勉強のし過ぎね（笑）でも、若い内からそんなんじゃ駄目だよな。マサもそうなら無い様にね♪』

忠告は嬉しいが、時はすでに遅し。僕はすでにそうなってしまっている。何もしていないのに「疲れたー」と、連呼している。

呆れながら笑い、安奈へ返事を返す。

『そうだね♪ お互い勉強頑張ろう』

『うん。春休みは補習なんかしないでよ』

安奈にそう言われ、春休みだけは何とか補習を免れようという気持ちになった。僕はこの日から頑張って勉強をして、何とかテストを乗り切ったのだ。これで、春休みは補習をしなくても済みそうだ。

第六十二通 突然の訪問者

三学期が終わり春休みに突入した。取り合えず、する事も無く家でゴロゴロとしていた。しかし、休みと言うのは意外と暇だ。漫画もすべて読み終えたし、何か面白い事が起きないだろうか。まあ、普段の生活じゃあ、そんなに面白い事なんて滅多におきないだろう。

「うーっ。暇だー。最近、安奈からのメールも来ないし……」

そんな事をばやきながらベッドに、横になっていると家のチャイムが鳴る。空耳かと思い無視していると、もう一度チャイムが鳴る。流石に、空耳ではないと気付き、ベッドから素早く立ち上がり、玄関へと向う。

「誰だろう。健介は合宿だし、和彦は彼女の所行くって言ってたし……」

独り言を口走りながら、僕は玄関のドアを開く。パツと広がる外の風景の真ん中に、可愛く微笑みたたずむ安奈。驚きのあまり声を出すのをすっかり忘れ、呆然と立ち尽くしていると痺れを切らせたのか、安奈が口を開く。

「大丈夫？　もしかして、風邪で寝込んでたとか？」

安奈の声が耳に届き、僕は我に返る。焦り声を裏返ししながら答えた。

「だ　大丈夫。ちょっと、びっくりしたただけだから」
「へへへッ。ドッキリは成功って事だね」

嬉しそうに微笑む安奈。僕も暫く間を開けて笑い出す。何が可笑しいか分からないけど、ただ何となく笑いが込上げて来る。暫し笑い続けた後に、僕は安奈を家の中に招いた。

取り合えずリビングルームにあるソファアームに、安奈を座らせ僕はキッチンに向った。

「何か飲む？　って、言っても麦茶とコーヒーしかないけど」

「そうだな。それじゃあ、コーヒーでいいよ」

キッチンに立つ僕の顔を見ながら安奈はそう言う。僕はブラックコーヒーをコップに注ぎ、テーブルに持っていく。

「砂糖とミルクは必要かな？」

テーブルにコーヒーカップを置きながら僕は訊く。安奈は少し迷う様な仕草を見せるが、笑顔で答えた。

「うん。必要かも。苦いの苦手だから」

笑みを見せる安奈に、僕も笑みを返して砂糖とミルクを取りにキッチンに戻る。シュガーと書かれた袋から、細長い棒状の袋に詰められた砂糖を二つ取り、冷蔵庫から取り出したミルクと一緒に、テーブルに運んだ。

「砂糖は一つで良かった？」

「うん。多分、大丈夫だよ」

砂糖とミルクを手渡す。コーヒーに砂糖とミルクが加えられ、ブラックだった色が変わっていく。ある程度スプーンでかき混ぜ、安

奈はそれを口に運ぶ。暫し間が空き、安奈が口を開く。

「まだちょっと苦かった……」

そんな安奈を見て、僕は笑っていた。

第六十三通 張り裂けそうな思い

安奈の突然の訪問から、三日が経つ。結局あの日は家で話をしただけだ。だから、今日は外で会う約束をした。そのため、今日は駅前まで来ている。待ち合わせと言う訳だ。

なぜ、駅前かと言うと、初めて待ち合わせしたのが駅前だったので、取り合えず駅前で待ち合わせになった。

しかし、今日も人が沢山いる。大抵の人が待ち合わせをしているらしい。こうも人が多いと、安奈を探すのも一苦労だ。

「おっ、安奈。コッチコッチ」

安奈を見つけ、僕は手を振りながら叫ぶ。安奈も僕に気付き微笑みながら駆け寄る。

「ごめん。ちょっと、遅くなっちゃった」

「気にしてないよ。僕の方が早く着ただけだから」

「今度からは私が、早く来るから」

「別に、勝負じゃないんだから……」

何やら張り切る安奈に、僕は笑いながらそう言う。その後、僕と安奈は繁華街を見て回った。色んなお店を見て周り、楽しく時を過ごしていく。流石に人が賑わっているだけあって、道に迷ったりもしながら、目的の公園にやってきていた。

「結構、遠かったね」

安奈はそう言って僕の方を見て微笑む。その微笑みは僕の心を、優しく癒してくれる。

「桜見られるといいね」

安奈はそう言って公園の中を見回す。そう、僕と安奈は今日この公園に桜を見に来たのだ。健介からの情報で、この公園で桜が見られるとの事だったが、何で健介がそんな事を知っているんだろう。少し疑問が残るが、そんな細かい事は気にしない様にした。

「さあ、行こうか。確か奥の方で桜が咲いてるって」

「でも、健介君何処から、そんな情報手に入れたのかな？」

「何処からだろう？ 僕も気になってたんだよね」

「まあ、細かい事気にしてもしょうがないよね。さあ、行こう」

安奈はそう言って微笑みながら駆け出した。ため息を吐きつつも、僕の顔は自然と綻び前を走る安奈を追いかけた。

「ちょっと！ 待ってよ」

走りながら安奈にそう叫ぶ。そんな僕に、安奈は振り返り可愛らしく微笑み、大声で叫ぶ。

「早くしないと、置いてくよ」

「だ、だから、ちょっと待ってって……」

そんな僕の言葉は届かなかったのか、安奈は僕に背を向け駆け出す。その背中にはドンドン遠ざかる。僕は足を止めその背中を見ていると、急に胸が張り裂けそうなほどの痛みを感じ、苦しくなる。このままだと、安奈との距離が遠ざかってしまいもう二度と会うことが出来ない気がした。

第六十四通 「君が好きだ」

安奈を追うのを忘れ、その場に立ち尽す。胸が痛み苦しく、視界は霞んでくる。涙が目からこぼれそうになるが、それを必死に堪える。すると、安奈の声が遠くから聞こえてきた。

「マゝサゝ。どうかしたゝ」

僕はこぼれそうになった涙を拭って、顔を上げ安奈の方に向かい軽く手を振りながら叫ぶ。

「何でもないよゝ。今、行くから」

この時、僕の中である決心が着いていた。初詣で引いたおみくじに書いてあった時期。それが、この日なんだと僕は悟った。安奈の方に向って僕は駆け出す。心臓はバクバクと鼓動をたてる。それは、走っているからなのか、不安からなのか分からないが、安奈に近づくに連れてその鼓動は大きくなっていく。

「ハア…ハア……」

「大丈夫？ 無理するからだよ」

息を切らせ芝生に寝転ぶ僕に、横に座った安奈が優しくそう言う。寝転ぶ僕の視界には、綺麗な桜と、その隙間から見える青い空が移っていた。桜はゆっくりと風に吹かれながら、花びらを散らしていく。

「綺麗だね」

「うん……」

安奈の言葉に自然と口が開く。そして、激しく鼓動をたてていた心臓も、いつの間にか落ち着きを取り戻している。風は優しく僕と安奈の間を流れ、桜の花びらが僕と安奈の側にゆっくりと落ちてくる。

重い体をゆっくりと起こすと、安奈が心配そうに声を掛けた。

「無理しないで、休んでた方がいいよ」

「うん。もう、大丈夫だよ」

僕はそう言って、ゆっくりと笑みを浮べる。安奈もそれに対して、微笑み返しゆっくりと桜を見上げた。

その後、何秒か沈黙が続く。それが、僕には何十分にも感じた。まるで時間が止まったかの様な感じだ。堅く塞がった口。開こうとすればするほど、口は開こうとしない。まだ、僕には勇気が足りないのか、どうしても声を出す事が出来ない。

楽しかった安奈との思い出が、口を開いた瞬間に終る気がした。迷いが僕を更に苦しめ、胸がまた苦しくなる。

そんな僕の手の平に、数枚の桜の花びらが落ちてきた。いや、僕には降りてきたように感じた。それが、僕に勇気をくれたのかも知れない。堅く閉ざされた口を僕はゆっくり開く。

「安奈……」

「なに？」

僕の声に安奈が優しく答える。

「実は……伝えたい事があるんだ……」
「伝えたい事？」

安奈は少し首を傾げ、顎に右手の人差し指を当てる。

僕の頭の中で整理されていた、安奈への言葉はいつの間にか真っ白になって消えていた。だから、シンプルにこう言うしかなかった。

「君が好きだ」

LAST MAIL 運命の赤い糸

――あれから二年が経つ。

高校を無事卒業し、僕は今ホテルの厨房で働いている。料理の腕を生かすための職業に就いたのだ。一年も働いていたので大分慣れてきたが、始めの内は物凄く叱られた。

健介は結局甲子園に行けなかった。けど、スポーツ推薦で大学へと進んだ。今では大学で野球をやっている。

和彦は実力で大学に受かったが、また彼女との距離は遠ざかり色々大変らしい。

それから、安奈とは……。

「ちょっと！ 遅刻だよ！」

「ご……ごめん……」

「最近、私がマサに待たされっぱなしだよ」

そう。僕と安奈は今付き合っている。今と言うより、二年前のあの日からだ。あの日、僕の告白に対して、安奈はこう答えた。

『やっと聞けた……。私も好きだよ……。』

今、思い返すと色々と恥ずかしい。

あの日の事を考えていると、安奈が僕の顔を覗きこみ言う。

「ちょっと、聞してる？」

「うん。聞してるよ」

「もう。今度は遅刻しないでよ」

「わかった。気をつけるよ」

僕がそう言うと、安奈は優しく微笑んだ。僕もそれに微笑み返す。

「さあ、今日は何処行こうか？」

「そうだな。先週は映画に行ったから……」

考える僕に対し、安奈が笑いながら言う。

「ここで、悩んでもしょうがないから、喫茶店でもいきましょう。

マサがジャンボパフェ食べた喫茶店に」

「まだ、覚えてたんだ……」

笑いながら僕はそう答える。

僕と安奈の恋は、結構結ばれるまで長かったけど、他の人と何も変わらない普通の恋だった。違うのは僕と安奈の出会いが、『間違いメール』だったと言う事だ。僕の送った間違いメールは偶然安奈に届いたが、僕と安奈は偶然なんて思っていない。あのメールは、きっと僕と安奈を結ぶ運命の赤い糸だったのかもしれない。

END

LAST MAIL 運命の赤い糸（後書き）

今回で間違いメールは最終話と言う事になりました。長い間ご愛読してくれた皆様、どうもありがとうございます。

初の恋愛小説でこんなにも愛読してくださる人がいてくれて、僕としてはとても嬉しく思っております。

これまで、評価・感想・アドバイスなども沢山いただきました。とても感謝しております。

それでは、寂しくなりますが、これまで応援ありがとうございました。また。

機会があれば、番外編でも書いてみようと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3313a/>

間違いメール

2011年10月3日02時04分発行